ぼくたちの四季

葉崎あすか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぼくたちの四季

【Ｎコード】
Ｎ９５７３Ｅ

【作者名】
葉崎あすか

【あらすじ】
ぼく（佐沼結人）は、今年中学に入ったばかり。絵が大好きな僕は、中学生になったら絶対美術部に入るって決めているんだ。だけど、ある先輩のせいで文芸部に入ることになってしまい……。

桜咲く少し前　01

「絵が上手ね。うちの部に入らない？　イラストを描いてほしいの」

「え？　何のことですか」　と、ぼくは聞いた。

春休み、朝日山公園で絵を描いていたら突然話しかけられた。

ぼくはそのとき、まだ咲いていない桜の木をもうすぐ描き終えるところだった。ベンチに座って描いていたら、スケッチブックに影が入った。太陽に雲がかかった様でもないし、何かなと思って顔を上げたら、中学校の制服を着た女の人が、僕の絵をのぞきこんでいたのだ。

その人は、ぼくが顔を上げたのにも気付かないで、じっと絵を見続けていた。

ぼくは、描いていた桜の木の前に人が立たれると続きが描けないので、しばらくボゥっとしていた。ネコがニャアとよってくる。

話しかけるにしても、どう言えばいいのか分からない。

「こんにちは、いいお天気ですね」　とか？

「なに、人の絵を勝手に見ているんですか」　とか？

それとも、「桜の絵が好きなんですか？」　がいいかな。

どうも、自分の絵をこんなにもじっくりと見られたことがないので、どう反応していいのか分からない。

でも、何か言った方がいいかな。けっこう時間たっているしなあ、今さら言うのもなんかおかしいかな。

と、ぼくが、うんうん考えていると、その女の人はようやく顔をあげた。

「続きは描かないの？」

「あ、まあ。そうですね」　良く分からない返事をしてしまった。

「ああ、わたしで見えないのね？　ごめんなさい」　そう言うと、

ぼくのとなりに座った。
そして、一行目の質問をされた。
「湖宮中に今年入るのよね？　それで、うちの部に入ってほしいの」
「いいえ、ぼくはまだ、湖宮小五年生です。今年の四月から六年生になるんです」　ぼくがそう言うと、その人は目を丸くした。意外だったのかな。ぼく、小学三年生にまちがわれたことはあるけど、中学生ははじめてだ。
「そうなの。残念ね……。……ええ、でも、いいでしょう。わたしも今年二年生になるから、あなたが湖宮中にあがるとき、わたしは三年生ね」
「そうなりますね」　ぼくはうなずく。
「お兄ちゃん？　どうしたの」　ぼくの妹が、ブランコからぼくの所へ来て言った。今年小学生に入るから、まだ幼稚園を卒園したばかりで、とってもかわいいんだ。
「名前は？　なんていうの」　ニッコリとほほえみながら言うその人の名前を、ぼくは知らない。「人の名前を聞く前に、自分の名前を言う」　という、おなじみの言葉が、ぼくの頭の中をかけめぐる。
「『ゆい』っていいます。あのね、お兄ちゃんと同じ字に、こう書いて『ゆい』です」　結衣が地面に木の枝で『衣』と書く。
「お姉ちゃんの名前は、なんてゆうの？」
「わたしは、竹内光です。植物の『竹』に、内側の『内』。『光』はピカッと光るやつ」　竹内さんは、結衣から木の棒を受け取ると、地面に『竹内光』と書いた。
「たけうちひかり……。なんか、かぐや姫みたい」　結衣は、ニコニコ笑ってブランコの方へ走っていった。
「結衣ちゃんのお兄ちゃん。あなたの名前は？」
「佐沼結人です。佐藤さんの『佐』に、さんずいの『沼』。妹と同じ字に、人間の『人』」　ぼくは、竹内さんから木の棒を渡され

たので、スケッチブックを横に置いて、地面に『佐沼結人』と書いた。
「これで、結衣ちゃんの『結』って字が分かったわ」　竹内さんはニコッと笑った。何がおかしいのか最初は良く分からなかったけど。
「……あ、そうか」やっと分かった。
妹は、竹内さんがぼくの名前を知っているんだと思って、ぼくの名前を説明に使い、ぼくも、妹が自分の名前を説明したから、ぼくは妹の名前を説明に使ったんだ。でも結局『結』の字は、ぼくが地面に書くまで、どちらとも説明してなかったんだ。
「なるほどね」　ぼくも少し笑った。
「ところで、来年の話になるのだけれど、うちの部に入ってくれるかしら？」
「その部って、美術部ですか？　ぼく、中学に入ったら美術部に入りたいと思っているんです」
竹内さんはほほえんだ。よかった……。
「今、部員が四人しかいないの」
「へえ、それは少ないですね」　おかしいな。湖宮中美術部は、部員の数が多くて活動が盛んだって聞いたことがあるけど。
「三年生が二人で、二年生がわたしと、もう一人しかいないのよ。今年、三年が引退したら、二人だけになるから、部存続の危機なのよね。だから、新一年生を私ともう一人で勧誘して、いろいろ呼びかけているの」
「そうなんですか。では、必ず入りますね。一年後になるけど、部がなくなっては、ぼくが困ります」　やっと、竹内さんが、なんでぼくに、話しかけてきたのかが分かった。
「ええ、よろしくね」
「はい」

桜咲く少し前　０２

「……というわけで、ぼくは、だまされたんです！」湖宮中文芸部の部室で、ぼくはこう叫んだが、誰も聞いてはくれない……。

あのときから一年後、ぼくは、竹内先輩の部活に入部した。べつに、その点は問題ない。でも、大問題なのは、その部が美術部ではなくて、文芸部だったことだ。

「べつに、美術部だと言った覚えはないわ」これは、竹内先輩の言葉。それはそうだけど。

「だったら、気付いたときに、約束やぶって、美術部に入ったらよかったじゃないか。ほら、となりの部室だぞ」これは、一年先輩の田中太一先輩の言葉。それはそうだけど！

「ぼくは、約束を破るのがきらいなんです！」

「だったら、何をしてほしいんだ？」田中先輩の冷たい一言。ぼくは、部室のパイプ椅子に座りながら言う。

「先輩の学年、部員が二人いるっていってたのもウソじゃないですかあ。部員は、全学年で三人しかいないし……」

「転校したのよ」竹内先輩は、パイプ椅子から立ちあがると、カバンを持って出て行ってしまった。

「えっと、もう帰るんですか？　まだ、四時ですよ」

「おまえ、本当にバカというか、なんというか……」田中先輩が、シャープペンをふりながら言う。ふったら芯が出るタイプなので、もうすでに、一センチくらい芯が出てきている。

「え……。どういうことですか。なんで？　え？」

「あのさあ、結人、漢字は得意か？」いきなり、田中先輩は言った。

「ええ、一般的には分かっているつもりですけど……」

「そんじゃあ、この漢字分かるか？　おれ、漢字が苦手な感じでさ」ハハと笑う田中先輩。

「つまらないです。……さっきから何やってるんですか？」
「んと、宿題。原稿用紙五枚だ。結人は、まだ宿題とか出ないだろ？　だったら手伝え」原稿用紙を指でつまむ田中先輩。
「いいですけど……。何を手伝えばいいんです？」
「結人は、漢字辞書だ」
「は？」
「ちなみに、おれは『じしょ』って漢字が書けない」
「はあ」

春は、桜の絵を言葉で描いて　01

コンピュータが来た。
パタンと折りたためるやつと、たためないやつの二台。
「ノートパソコンとデスクトップだろ。それくらいは分かれよ」
それ以外は分からない田中先輩がキーボードを触っている。ちなみに電源はついていない。
「誰も、コンピュータを使えないの？」　竹内先輩がコンピュータの乗っているテーブルとはちがうテーブルで、文庫本を開きながら聞く。
「ああ、おれも結人も電源の付け方さえ分からない」　手のひらを肩まで上げてお手上げのポーズ。
「田中先輩、そのポーズに会いますね」　そうぼくが言ったら、キッと田中先輩にとにらまれた。
「せっかく、顧問が持ってきてくれたのに……。もったいない」
このコンピュータは、顧問の南条先生が使わなくなったのを持ってきてくれたものだ。「古い型だけどごめんね」　と言いながら置いていったけど、ぼくらは、どこがどう古いのか、コンピュータとは基本的になんなのか、さっぱりだ。
「まあ、いいよな。前と同じく、原稿用紙にシャーペンだ」　田中先輩が、またシャープペンをふりながら言った。カチャカチャと芯が出る。
「あれ？　また、なにか書いているんですか」　ぼくがのぞきこむと、原稿用紙に赤ペンでいろいろ直されていた。
「昨日の先生に提出したらさあ。こんなになって帰ってきた」
「へえ」　じっくり見てみると、ほとんどが漢字のまちがいだった。
「結人。おまえ、人並みに漢字分かるって言ってたじゃないか」
「『ゆううつ』なんて、人並みに使いませんから。漢字分からな

いのに、難しい漢字を使いたがるんだから」　ぼくが軽くため息をつくと、竹内先輩が紙に『憂鬱』と書いた。
「はい」　竹内先輩が、田中先輩にシャープペンを返した。
「……すごい」
「まあね。わたしは、必要ないけど田中くんは必要よね。コンピュータ」
「どうしてです？」
そのとき、部室の戸がガラリと開いて、ぼくの知らない人が顔をのぞかせた。
「光先輩いますか？　ああ、すみません。鍵、かしてもらえますか？　美術部で使うんです」
「はいはい。ちょっと待ってね」　竹内先輩は立ちあがると、壁のフックにかかっている鍵を取った。
「え、それ部室の鍵じゃ……」
「ええ、そうよ。はい」　鍵を渡す竹内先輩。なんだろう。鍵の絵のスケッチでも描くのかな。
「よう、高梨。どうしたの？」　田中先輩が、原稿用紙から顔を上げて言う。今、気付いたみたいだ。
「う、うん。なんでもない……。あ、それ明日まで提出だからね。必ずって、先生が言っていたから」
「はいはい。漢字を直すだけだからな。……けっこう直すところがあるけど」　ガクッと首をうなだれる田中先輩。かわいそうに……。
竹内先輩は、壁の時計を見た。僕もつられて時計を見る。狭い部室には、ふつりあいな大きな時計が飾られている。そういえば、やけに新しい。ホコリもかぶっていない。壁も真っ白だし、窓につまれたダンボールと紙の山にも、チリひとつない。竹内先輩か田中先輩がきれい好きなのかな。
「もう五時ね。はい、部活終了。あ、ちょっと薫子、鍵かえして」
「あ、はい」　高梨先輩から、鍵を受け取る竹内先輩。

「ほらほら、鍵閉めるから、出た出た」
「うう、まだ終わってないのに……」　田中先輩がうめきながら、原稿用紙をリュックサックに詰める。ぼくは、部活中、何もカバンから出していないので、そのままカバンを持つだけでいい。
「田中くん。早くしなさい」　竹内先輩、高梨先輩、そしてぼくはすでに廊下から出ている。
「しくしく。しくしく……」　口で泣きまねをしている田中先輩が出てきた。
「はい。明日の朝までには返してね」　部室の戸に鍵をかけた竹内先輩が、高梨先輩に鍵を渡した。
「はい。ありがとうございます」　高梨先輩は、軽くおじぎをすると、となりの戸――美術部部室へと入っていった。

春は、桜の絵を言葉で描いて　０２

「美術部は、まだ部活をやるのか。大変だな」　手に持っていたリュックサックを背負う田中先輩。

教室の通路側の壁は、上半分が窓になっていて、中を見ることができるようになっているんだけど、美術部はカーテンが閉まっていて、中の光がもれている。だぶん、外からの光を入れないようにするためだろう。外からの光は、時間によって変化するから、静物画なんかをやっていると、影か変化してしまうんだね。

それにしても、美術部部室は広いなあ。文芸部の三倍はあるんじゃないだろうか。でも、戸は、黒板がある側に一つしかない。どうしてだろう。

「先輩も大変ですね。宿題が大量にあって」

「ふっ……。今に見てろ。英語、数学……。怪物がおそいかかるからなあ」　ケッケッケと笑う田中先輩。いじわるな先輩だ。しくしく。ぼくは、心の中で泣きまねをした。

「学校にはもうなれたかしら？　もうすぐ入学して一ヶ月よね」

昇降口まで歩きながら竹内先輩が聞いてきた。

「ええ、大丈夫です。クラスにも小学校からの友達も多いし。先生も優しいし」　となりのリュックの先輩以外は先輩方も優しいですし。という言葉は、のどまで出かかってかろうじて飲みこんだ。ごっくん。

「そう、それは良かった」

昇降口についた。ぼくらは、別々の下駄箱が並んでいる通路に入り、上靴を外靴に取りかえた。

「じゃあ、わたしこっちだから。また明日ね」　竹内先輩は、西門の方に向かって歩いていった。

「さようなら」

「ううっ。寒いなあ。もう春じゃないのかよ」　田中先輩が肩をすくめた。

ぼくらが通う湖宮中は、湖宮市の真ん中にあるので、門がひとつだと、学校をぐるっと回らないと学校に入れない生徒が出てくる。そこで、湖宮中には四つもの門がすえ付けられているんだ。今、竹内先輩が出て行った西門が正門で、一番立派。車の出入りができるのも、この西門。あとの三つはおまけみたいについている。一番ひどいのは、ぼくと田中先輩が出る東門。俗に言う裏門で、簡単な扉しかない。一人は楽に通れるけど、二人並んで通るには少し無理があるくらい狭い。

門は、四つあるのに、昇降口は一つしかないので、結局は、校舎をぐるりと回らなくてはならない。まあ、門を出た道路は、交通量が多いから、学校内を歩いていくほうが安心して、歩ける。門を取り付けたのは、失敗ではないってことだ。

グラウンドでは、まだ、運動部が部活をしていた。ランニングをしている部にもすれちがった。

キイイと音を立てて、東門の扉を外側に開いた。東門は、ネコの侵入が多発しているので、扉は開けたら閉める決まりになっているんだ。

「この音、何とかしてほしいよな。おれ、この音が一番きらいだわ」　田中先輩が耳をふさぎながら言う。

「なあ」

「なんですか？」　家まで歩いていると、田中先輩が話しかけてきた。

中学に入るまで気づかなかったのだけど、なんと、田中先輩とぼくの家が、同じ通りの三軒をはさんだおとなりさんだったのだ。今思えば、町内会の回覧板を届けたような記憶も、あるような、ないような。

それに気づいてからというもの、学校への行き、帰りと一緒になってしまったのだ。

「知ってるか？」
「何をです？」
「いや……、なんでもない」
「なんなんですか」

春は、桜の絵を言葉で描いて　０３

「べつに」　ハハハと笑い出す田中先輩。
こんな会話をして、何が楽しいんだ。何でいつも田中先輩と一緒なんだ。という疑問は、心の奥深くのさらに深くにしまってある。鍵をかけて、厳重に保存。液体窒素で凍らせてもいいのだけど、液体窒素ってどこにあるのかが分からない。何を考えているのだ、ぼくは。とりあえず鍵は、キーホルダをつけてポケットにしまっておこう。
ハハとまだ笑い続けている田中先輩。思い出し笑いでもしているのだろうか。その思い出が分からないものにとっては、いきなり笑い出されても、困るところだ。
ぼくは、田中先輩へのいたずらをこころみた。
「先輩」
「なんだ？」　笑いが止まった田中先輩がぼくに聞く。
「なんでもありません」
「は？　なんだよ。言えよ」
「いえ、なんでもないんです」
「なんだあ？　言わないと、漢字の辞書を家に送ってやるぞ」
「そうされて困るのは先輩だけです」　ぼくは、笑い出した。

次の日。ぼくは、いつも通り、田中先輩と学校に行き　（いつも、家から出ると、ちょうど田中先輩が学校に向かって歩いていくところにあう。べつに、約束しているわけじゃないのに、一緒に行くことになってしまうんだ）、　いつも通り授業を受けた。
そして、部活に行く途中の廊下が、事件の始まりだったんだ。
「ん？　どうしたんだろう」　なんだか、美術部部室の前がさわがしい。そのうしろを通り過ぎるとき、だれかが、叫び声に近い声で、さわぎ立てているのを聞いた。

「はやく、だれか、鍵を持ってきて！　大事な作品が、壊されてしまうわ！」
「でも、部長。昨日から、鍵が紛失しているんです！」　ぼくと同じクラスの、髪をふたつに結っている小柄な木野が、戸にはめこんである窓をのぞきこみながら言った。
ぼくも、人ごみのうしろから背伸びをして、窓を見てみた。
「えっ」　なんと、美術部部室の中は、ネコが一匹。これにはぼくもおどろいた。
「先輩。見ました？　美術部にネコが！」
部室に入ると、田中先輩が、パイプ椅子にすわって、マンガ本を読んでいた。

春は、桜の絵を言葉で描いて　０４

「ああ、大変だな」　といいながらも、田中先輩はマンガ本から目をはなさない。
「竹内先輩は？　どうしたんですか」　田中先輩との会話をあきらめたぼくは、カバンを開けながら聞いた。
「三年生の集会が放課後にあるんだとさ。もうすぐ終わると思うけど。さっき、鍵だけ開けて出て行った。受験生は大変だよなあ」
軽くため息をつく田中先輩。
「え？　まだ五月ですよ。受験はまだまだ先じゃないですか」
「甘いな、結人は。二年後苦労するぞお。今のうちに勉強しとけ。……あれ、その紙は何だ？」　やっと、マンガ本から顔を上げた田中先輩は、ぼくがカバンから取り出した原稿用紙に目をとめる。ぼくは、ニッコリとほほえむ。
「文芸部に入ったんですから、何か書いてみようと思いまして」
左手に持ったシャープペンをふる。田中先輩のマネだけど、ぼくのはふっても芯が出るタイプではないので、中に入っている芯が動くかすかな音しかしない。
「ほう……。で、何を書くんだ？　小説？　詩？」
「詩って柄じゃないから、小説かな……とは思いますけど。どうかけばいいか良く分からないんですよね」
「おれが教えてやる。先輩に何でも聞け」　えっへん。と胸をはる田中先輩。頼もしいのかどうなんだか良く分からないけど……。
「まず、最高で、原稿用紙何枚書いたことがある？」
「そうですね……。小学校のときの読書感想文で、三枚くらいかな」
「甘いなあ。なんて甘いんだ。ああ、黒飴なめたくなってきた。持ってないか？　黒飴」　田中先輩は片手を差し出す。
「学校に、お菓子とか持ってきちゃいけないんですよ」　ぼくは、

約束をやぶるのも、校則をやぶるのもきらいだ。
「黒飴はお菓子じゃないんだが……。まあ、いい。おれの最高は、四十七枚だ」　えっへん。とさっきと同じく胸をはる田中先輩。なんか、頼もしく見えてきたのは、幻覚かな。
「……すごい。小説ってそんなに書かなくちゃいけないんですか」
「そうだ」　深くうなずく田中先輩。ぼくにそんな枚数が書けるんだろうか。
「他には？　書き方とか教えてください！」　ぼくがいきおい良く聞くと、田中先輩は
「もう教えることはない。執筆にはげみなさい」　と、マンガ本に目を落とした。少し、田中先輩のことを頼もしく見てしまったぼくがバカだった……。
ぼくは、窓ぎわのパイプ椅子に座る。田中先輩とは一番はなれている席だ。
原稿用紙を広げ、シャープペンをかまえる。さて、何を書こうかな。
書き出しは、やっぱり『博士！　大変です！』かな……。

春は、桜の絵を言葉で描いて　05

「博士！　大変です！」　扉をバンと開け、助手のトムくんが、わしの研究室に飛んできた。
「どうしたんだね！　トムくん。何があった！」　わしは、座っていた椅子から立ち上がった。いきおい良く立ち上がったため、椅子がガタンと床にたたきつけられた。
「博士が作った『犬型ロボット　ツー』の口から、ネコが大量に出てきています！」
「なんだって！」　わしは、目を大きく見開きながら言った。トムくんが後ずさりする。わしの目が怖いんだろう。なんといっても、わしは、三十年前に、『目の大きさグランプリ』　で優勝したことがあったんだからな。それに、日々の徹夜で目が充血している。さぞ、怖い顔になっていたことだろうか！
そのときのわしは、そんなことおかまいなしに、おどろいているトムくんをつき飛ばし、研究室の外に出た。
「はああ！　なんてこと」
緑の丘に立っている　『ツウェンター研究所』　の真っ白い壁が、なんと　『犬型ロボット　ツー』　の口から出てきた大量のネコたちの、爪とぎになっているではないか！　研究所を建設したときに、
「ザラザラの壁にしてください。なんか、かっこういいでしょ」
なんて言わなければ良かったのに！
「は、博士……。どうするんですか？」　よろよろと、研究所からトムくんが出てくる。良く見ると、目が青くふくれている。
「どうしたんだね？　トムくん」　わしは、首をかしげた。
ああ！　そうか。トムくんは、このネコたちに、やられたんじゃな！　わしのかわいい助手、トムくんを、こんな風にしてくれて、なんてこと！　それに、ニャー、ニャーとなんてうるさいんだ！
「ええい、しずまれええ」　わしは、目をカッと見開いて、大声

で叫んだ。
すると、大量のネコたちは、ビクッとふるえると、サーと海の水が引いていくようにして　『犬型ロボット　ツー』　の口に吸いこまれていった。
「なんだったんでしょうね」　わしの研究室でコーヒーを飲みながら、トムくんが聞く。もうすでに、キズは治っている。
あれから、わしとトムくんは、　『犬型ロボット　ツー』　の口にガムテープをはって、ダンボールに入れて、倉庫にしまった。
「あれは、わしが最初に作ったロボットなんだ」
「へえ、あんなにたくさんですか」
「そう、楽しくて作ったら、多すぎて怖くなった」　わしは、あのネコたちを思い出して、みぶるいがした。
「ニャー、ニャー泣くんだ。目がかわいい。そっくりなんだ。でも、ロボットなんだ。生きていないんだよ。それがたくさん。それが、怖かった。だから、ネコじゃない犬ロボに飲みこませたんだ」
「……」　トムくんは、コーヒーをだまってすすっている。きっと、わしのことをあきれているんだろう。明日にでも、この研究所を去るかもしれない。
「壁をザラザラにしたのだって、本当は、ネコの爪を、とがせるためなんだ。わしのロボットは、つめも伸びる。すごいだろう？」
わしは、軽く笑って、コーヒーを飲んだ。
「ぼく、ここを出ます」　やっぱりな。わしは、窓の外を見た。青空が美しい。
「あ！」

「何書いてるの？　もしかして小説？　うわあ、見せて、見せて」
竹内先輩が、原稿用紙をのぞきこんで来た。いつの間に来たんだろう。外を見ると、もう、暗くなってきている。

春は、桜の絵を言葉で描いて　０６

「まだ、できてないですし……」
「そう……、まあ、そんなに早くできないわよね。じゃあ、出来上がったら最初に見せて。約束だよ」　竹内先輩は、ぼくのとなりのパイプ椅子に座ると、文庫本を取り出した。
「はい。えっと……先輩は、書かないんですか？　小説」
「ええ、気が向いたらね」
「へえ。どんなのを書くんですか？」
「うん。そうね……。推理もあればファンタジーもあるし、ホラー、恋愛、ＳＦ、詩なんでも、書いたことは、あるわね」　文庫本を開く竹内先輩。
「読んでみたいです」
「つまらないわよう」
「そう……ですか」　ぼくは、原稿用紙をカバンにしまった。なんだか、なれないことをすると疲れてしまう。
「ふあああ」　田中先輩があくびをしながら、部室に入ってくる。そういえば、田中先輩の姿を見かけなかった。
「どこいっていたんですか？」
「ん？　図書室」　最初と同じパイプ椅子に座る田中先輩。
「マンガ本を返しにな」
「マンガ本って、図書室にあるんですか？」
「ちがうよ。ちがう。図書室にいる先輩に借りていた本を返しに行ったんだ」
「ああ、なるほど」
「ところで、部長。もう五時すぎだけど終わりにしなくてもいいのか？」　田中先輩が、竹内先輩に聞く。
「ええ、そうね。終わりにしましょう」　竹内先輩は、本を閉じて、カバンにしまった。

「明日は、土曜ね。休みよ」　キランと目のおくが光る竹内先輩。
「何か予定でもあるんですか？」　ぼくが聞くと、竹内先輩は、ヘニョンと笑った。
「なんでも、ないのよ」
ぼくが、最後に部室を出ると、もうすでに、竹内先輩が廊下を歩いていた。
「鍵、かけなくてもいいんですか？」
「いいんだって。鍵、どっかに忘れてきたんでないの。ま、何もとられるものはないから、いいんじゃない」　そういって、田中先輩も廊下を歩きだす。
「そういえば、部活前に、美術部にネコがいたんですよ」　竹内先輩と田中先輩に追いついてぼくは、話す。今日もカーテンが閉まっていて、人がいるのが影で分かる。
「どうしたんでしょうね」
「ちゃんと、扉、閉めとかないのが悪いのよ」　竹内先輩が、そう言った。どういうことだろう。
今日も、竹内先輩とは昇降口を出たところで別れて、ぼくと田中先輩は、東門へ向かう。
「よう、高梨！　なんだ、スケッチか？」　田中先輩が、片手をあげる。何かなと思ってみてみると、高梨先輩が、スケッチブックを持って立っていた。
「なんだ。何にも書いてないじゃないか」　田中先輩が、スケッチブックをのぞきこみながら言う。ぼくも見たけど、何にも書いていない。夕日がしずむ、一番きれいなときなのに。
「絵を描くのは、苦手なの」　高梨先輩が、苦笑する。短い髪が、夕日に照らされて、赤くそまる。
「それじゃあ、また来週ね」　高梨先輩は、何も書いていないスケッチブックを閉じると、校舎に向かって歩き出した。
「不思議だったんだよなあ」　東門へ歩きながら、田中先輩がつぶやく。

春は、桜の絵を言葉で描いて　07

「高梨のやつ、小学のときから、図工とか苦手できらいだったのに、中学に入ったとたん、美術の授業を真剣に聞いちゃってさ。それに、美術部に入ったなんてさ」

「うん。考えられる可能性は、ひとつですね」　ぼくは、なんの根拠もないことを話す。つまり、でたらめだ。

「なんだ？」

「高梨先輩は、美術部の誰かに恋しちゃったんじゃないですか？」

「な……。まさか」　田中先輩は、目を丸くして昇降口があるほうを向く。とうぜん、高梨先輩の姿は見えない。東門の近くにいたので、昇降口が校舎に隠れてしまっている。田中先輩は、後ろ歩きしながら、東門を出る。ぼくは、その後をあわてて追った。

「大丈夫ですか？」　ぼくは聞く。だって、田中先輩がボゥっとしたままでいると、車にひかれそうになったり、みぞに、はまってしまうからだ。でも、後ろ向きに歩かれるよりは、ましだ。

「ああ、じゃあな」　家の前につくと、田中先輩はやっと声を出して、家に入っていった。学校から、ぼくの家のほうが三軒分、距離が短いのだけど、心配なのでちょっと送ってあげたことに、先輩は気づいているのだろうか。

一体どうしたのだろう。ぼくは、家につくちょっとの間、考える。いきなり、風邪を引いたでもないし、石が頭の上に落ちたわけでもない。もしかして、さっきぼくが言ったでたらめに、気づいて怒ったのだろうか。だから、なにも話さないとか。

ああ、家についた。玄関に入ると、カレーのにおいがする。金曜日はいつもカレーライスなんだよなあ。

月曜日の放課後も、美術部部室の前は混雑していて、窓を見ると、やっぱりネコが何匹かうろうろしていた。

「あれ、鍵、見つかったんじゃなかったの？」　ぼくは、近くにいた木野に話しかける。
「ううん、金曜は、となりの部の部長さんが、なぜか開けてくれたの」
となりの部？　美術部は、別校舎の一番端で、階段に一番近い教室だから、となりは、一つしかない、文芸部だ。ってことは、鍵を開けたのは、竹内先輩か……。
「え？　どうして、先輩が持っているのかな……」ぼくはつぶやく。
「なんかね、美術部と文芸部は、同じ鍵で開くみたいなの」
「へえ、それじゃあ、今日も先輩に開けてもらったら？」
「それがね……、文芸部に行ったんだけど、ノックしても誰も出なくて……。佐沼くん、行ってくれる？　文芸部だよね」力強い目で、ぼくを見つめる木野。
「いいよ」　ぼくは、軽くうなずくと、文芸部の部室へ向かった。木野もついてくる。
カラリと扉が開く。なんだ、誰かいるんじゃないか。そう思って部室に入ると、真っ暗だった。電気がついていない。
「あれ……、どうしたんだろう」　電気をつける。ひと一人いなかった。また、集会か図書室にでも行っているのだろう。そう思って、ぼくは、いつも鍵がかかっているフックのところへ行く。
「え？　ないなあ」　ぼくは、首をかしげる。
「どうしたの？」　木野が、廊下から部室をのぞきこみながら、聞いてくる。
「いやね、鍵がないんだよ。いつもここにかけてあるのに……。先輩まだ来てないのかなあ。でも、鍵は開いていたし……」
「そう……」
「葉子、鍵が開いたわよ」　木野を呼ぶ声がする。
「ええっ、本当？　だって、鍵は？」　木野は、美術部室にかけ出していった。

春は、桜の絵を言葉で描いて　０８

部室には、ぼく一人が残る。
昨日座っていた窓ぎわパイプ椅子に、ゆっくりと座ると、カバンから原稿用紙を取り出した。
金曜日に書いた小説の続きを書きはじめて、約三十分後。
「おう、書いてるなあ。どら、先輩に見せてみ」　田中先輩が、部室にやってきた。
「まだ、できていなんで……。そうだ、どうして鍵が開いていたんですか？」　ぼくは、田中先輩の原稿をとろうとする手をするりと抜けて、質問をする。
「金曜、鍵をかけなかったからじゃないか」
「ああ、そうか」　どうも、土日をはさむと記憶が飛んでしまうらしい。
田中先輩は、金曜と同じパイプ椅子に座って、原稿用紙を取り出した。
「さあて、書くかな」
「何をですか？　また宿題ですか」
「ちがうって、小説だろ」シャープペンをカチャカチャふる田中先輩。どうやら、それが癖のようだ。
「そういえば、竹内先輩はどうしたんですか？」田中先輩に今にもかみつかれそうなので、話題を変える。
「さあ、見かけんなあ」　まだ、ぼくをにらんでいる。
「文芸部と美術部の部室って、鍵が同じなんですね。どうしてですか？」
「え？　お前、知らなかったの？　元々、ここも、あっちも美術室だったんだよ」
「へえ……」
美術部の部員は去年の時点で、五十人もいたらしい。元々は、学

校の美術室を部室として使っていたのだけど、それでも収まりきらなくなったので、新しく、同じ大きさの美術室を作り、いままでの教室を美術部にうけわたし、入り切らない部員は、新しい美術室で、作業することになった。

そこで、そのときの文芸部部長が手を上げた。竹内先輩ではない。森先輩というらしい。そのとき、森先輩は、こう提案した。

「旧美術室を半分、文芸部にくれませんか？」　と。

理由は、文芸部も、部室がなくて、図書室や教室で作業をしていたんだ。だから、部室がほしいと。一年前の部員は、四人だから図書室で十分じゃないか、という意見がでたのだけど、森先輩の熱心な説得で、部室を手に入れることができたというわけだ。

半分は、あまりにも広すぎるので、美術室の四分の一のところで、旧美術室に白い壁がはられた。それが、ぼくが疑問に思った真っ白な壁だ。

そういういきさつがあって、文芸部と美術部の部室は同じ鍵で開くというわけだ。

「なるほど……」　うんうんと、ぼくはうなずく。

「すごいだろう？　森部長は」　まるで自分のことのようにえばる、田中先輩。

「ネコは？　どうして、美術部にネコがいるんですか？」

「うーん。さあなあ」　腕くみをする田中先輩。

「それにしても、部長、遅くないか？」

「そうですねえ」　ぼくは、テーブルにおいていたシャープペンを手に取り、原稿用紙に向かう。田中先輩もシャープペンをカチャカチャと鳴らした。

春は、桜の絵を言葉で描いて　09

「おうおう、部長登場！」　ガラガラと戸を開けて、竹内先輩が入ってきた。機嫌がよさそうだ。手にたたんであるパイプ椅子を一脚持っている。それを、田中先輩の横において、自分は向かい側に座る。ぼくの横だ。

「どうしたんですか？　遅かったですね」　ぼくは聞く。竹内先輩は、ニコニコだ。

「いいえ。べつにい、あ、そうそう、帰りに東門をちゃんと閉めて帰りなさいね。クラスのみんなにも言ってくれる？　田中くんもね……、ってあれ？　小説書いているのね」

田中先輩は、原稿用紙に向かっていた。竹内先輩に気づいているようすもなく、ときおり、となりに置いてある国語辞書を引いている。まったく、ぼくに頼らずに最初からそうすればよかったのに。

「田中くんは、小説を書きはじめると、周りが見えなくなるのよね」

「……そうだ、ぼく、東門を閉めた記憶がない……」　ぼくは、竹内先輩に言われて、やっと思い出した。何かを、忘れているような気がしてたんだよなあ。

「でも、何で、知っているんですか？」

「そりゃあ、美術部にネコがいるからね」　竹内先輩が、ぼくのとなりのパイプ椅子に座った。

「え……。ああ、そうか。そういうことかっ」　ぼくは、立ち上がった。パイプ椅子がガタンと倒れる。

「へ？　なんだ？　どうした？　……おう、部長。いきなり出現か」　椅子が倒れる音に、顔を上げる田中先輩。寝ておきたようなボゥっとした顔だ。

「分かりました、田中先輩！　ネコが美術室にいたわけが」

「うん、東門だろ」　田中先輩はそういうと、原稿用紙に戻って

いった。
「へ？　知ってたんですか？」　ぼくは、倒れたパイプ椅子を、元に戻して、座る。
「そりゃあ、今回のことに、薫子が関係しているからよ」　竹内先輩は、ニコニコ顔で、文庫本を開く。
「な……。部長、何を……」　とつぜん、しどろもどろになる田中先輩。
「え？　……どういうことです？　薫子って、高梨先輩のことですよね」
「そうよう。なんか、分かったって言って何にも分かってないようだから、わたしが、説明してあげるわ」　竹内先輩は、文庫本を閉じると、椅子から立ち上がって、歩き出した。
「さて、ことのはじまりは、東門の扉の閉めの悪さからおきたことなの」
「え？　ぼくが、原因なんですか？」　ぼくは、自分を指さしながら言う。
「ええ、そうよ。でも、他に東門を通った人も、原因ね。閉めた扉があったら開けてから通って閉めるけど、最初から、開いていると通っても閉めはしないわ」　ぼくは、竹内先輩の言っていることが良く分からない。
「文芸部は、比較的他の部より、早めに終わるの。ということは、帰りに東門を一番に出るという日が多いということね。東門を、開いたままで帰ってしまったんでしょう？」
「はい。あ、でも、金曜は、元から扉が開いていたような……」
ぼくは、田中先輩が、後ろ向きに東門を出る姿を、思い出していた。そう、そのときは、扉が開いていたんだ。
「他の部が、終わって、東門を出ようとすると、扉が開いている。ネコが入ってくるのは夜だけだから、昼は常時開いているの。だから、昼と同じだから、誰も不思議がらないし、ネコのことなんてそんなに、覚えていられるものではないわ」　そうか、金曜は、文芸

部が部活を終える前に、終わった部があって、扉を閉めないでいたんだ……。竹内先輩は、一息つくと、話を再開した。
「扉が、開いていたから、ネコが侵入したわ。そこに、部活を終えた薫子が、通りかかったの」
「え？　高梨先輩が？」　竹内先輩はうなずく。
「そう、薫子は、ネコをほおって置けなかったのね。その日は、一段と寒かったから。それに、雨も降っていたようだし。だから、美術室にネコを入れたの。外においてはかわいそうだし、夜はここら辺の交通量が多いから、危険でもあるのよね。美術室に、ネコを入れたのはいいが、美術室の鍵は前から、紛失している。鍵をかけなかったら、ネコが、廊下に出てしまうかもしれない。そこで、思い出したの。文芸部と美術部の鍵が同じであることを。だから、借りに来たのよ。鍵をね」
「でも……」　ぼくは、疑問に思ったことを話す。
「時間的におかしいですよ。ぼくが、扉を閉め忘れるより先に、高梨先輩が鍵を借りに来たじゃないですか」
「ふうう」　竹内先輩が、パイプ椅子に腰を下ろした。
「もう、話すのは疲れたわ。田中くん。美術部から薫子を呼んできて。当事者から話してもらいましょう」
「え？　おれが呼んでくるの？」　今まで、だまって聞いてきた田中先輩は、目を白黒させながらも、立ち上がり、部室から出て行った。

春は、桜の絵を言葉で描いて　１０

「ふああ」　あくびをする、竹内先輩。小さくて上品なあくびだ。
「ねむいわ。……ほんとにねむい」　テーブルにつっぷす竹内先輩。
「やっぱり、受験勉強とかってしているんですか？」　田中先輩の言葉を思い出し、ぼくは聞く。
「んや、ぜんぜん。昨日の夜中まで、ゲームしてたんだよう」
とろんとした顔を、ぼくに向ける。
「へえ。なんのゲームですか？」
「テトリス」
「……テトリス。……どれくらいやってたんですか？」
「うーんと、十時からだから……五時間くらいかな」　十時から五時間って……夜中の二時までテトリスをやってたってことか……。
そのとき、戸が開いて、田中先輩が高梨先輩をつれてきた。
「こっちこっち！　ここに座って、薫子」　竹内先輩が、ぼくの前の席を手で示す。長テーブルの辺が長いところを二つくっ付けた形のテーブルの四つの角に、四人が座ったことになる。
「じゃじゃーん。部長、竹内光から、嬉しい情報です！　新入部員の高梨薫子さん！　拍手！」　一人で拍手をする竹内先輩。そうか、これできげんが良かったんだなあ。ぼくも、拍手に加わる。パチパチ。
「え、ええー！」　田中先輩が、となりに座っている高梨先輩を見て、それはそれは大きな声を出した。
「うるさいなあ」　田中先輩を横目でにらみながら、耳をおさえる高梨先輩。
「さあさあ、新入部員を歓迎して、みんなで自己紹介と行きましょう！」　イエイと一人で盛りあがる竹内先輩。
「わたしは、三年四組の竹内光です。ここの文芸部部長と生徒会

副会長をやってます。よろしく！　はい、田中くんの番」　田中先輩は、先生に当てられた小学生みたいにピシッと立ち上がった。

「二年二組、田中太一です。文芸部副部長です。えっと……、よろしく」

「はい、次は、佐沼くん」　ぼくが、ここに入部したときも、こんな感じだったなあ。一年前と竹内先輩の印象がちがくて、すごくびっくりしたんだよなあ。と、ぼやぼや思いをめぐらせていたので、当てられて、ぼくも田中先輩みたいに、立ち上がってしまった。恥ずかしいけど、すぐ座るものおかしいので、立ったまま自己紹介する。

「一年五組の佐沼結人です。入って、まだ一ヶ月もたっていないので、いろいろ教えてください……じゃなくて、えっと、よろしくお願いします」　ぼくは、軽く頭をさげると、やっと座ることができた。

「はい、薫子」

「はい、高梨薫子、二年二組です。美術部に入っていたのですが、つまらないので、やめました。光先輩、結人くん、ついでに太一。これから、よろしくお願いします」　高梨先輩は、深く頭を下げた。自然とわきおこる拍手。

「今から、部員は四人ね」　竹内先輩がニッコリと笑った。

春は、夕焼けと黒飴ふたつ　01

わたしは、久しぶりに早く終わった部室を飛び出した。本当は、南門からの方が家から近いのだけど、ある人に会えることを期待して、いつも東門から帰っている。

「薫子、また明日ね」

「うん、また」　すれちがう陸上部でクラスメートの菅野砂知が、軽快な足どりで走っていく。寒いのに、よくやれたもんだ。走るから、あたたかいのかな。

夕焼けがきれいだ。

わたしは、夕焼けが好きだ。絵を描くのではなく、言葉で表現したい。文芸部に、本当は入りたかったのに、ある人がいるおかげで、入部しそこねた。それに、親が無理やり、美術部への入部をおし進めたこともある。将来は美大に入れたいそうだ。まったく、ぐちゃぐちゃだ。

東門に近づく。今日は、文芸部が終わっていなかったみたいだから、今日はここであの人を待ってみようかと思う。

「あれ？」　思わず声に出してしまった。最近、ひとり言が多いと砂知に注意されたことがある。まあ、それは置いといて。

三匹、ネコがいる。目がするどい黒ネコ一匹と、三毛ネコが二匹。ニャアとも言わずに、わたしを見上げている。少し、体がぬれている。学校の校舎にいたから気づかなかったけど、雨が降っていたらしい。地面はもう、乾いているから、降ったのは昼ごろだろうか。

「ふん……、どうしよう。どうしてほしい？　おなかすいたの」

わたしは、カバンの中に入っているパンを取り出して、三つに分けた。

「はい、どうぞ」　やっぱり、ひとり言多いかな。横にのけて置いておいた砂知に、注意される。　（――ひとり言多いよ、薫子）

わたしはそれを、くしゃくしゃに丸めて、遠くに投げ捨てた。

あ、ポイ捨てか。あとで、拾わなくちゃ。
東門は、閉めておく。また、ネコが入ってきたらめんどうだし、このネコたちが、道路に飛び出したりでもしたら、大変だ。
わたしは、ネコを三匹、抱こうと思ったけど無理だったので、黒ネコを一匹小わきに抱えて、そっと昇降口に入った。黒ネコを最初に持ってきたのは、一番やんちゃそうだったから。　ほかの二匹は静かにしていた。
美術部の部室についた。窓から見る限りでは、カーテンで分からないけど真っ暗で誰もいなさそうだ。鍵は前から紛失しているはずなので、開いているはず。
わたしは、そっと部室の戸を開ける。すぐ近くの壁にある電気のスイッチもつけた。
明るくなる部室。
「誰もいない……」　わたしは、ホッとため息をついた。見つかってもべつに怒られないと思うけど、美術部員には見つかりたくない。
ネコをそっと床に置く。ネコは、タタッとかけだした。やっぱり、ここに連れてきてよかった。そうでなきゃ、今ごろ車にひかれてたわ。
わたしは、木製の机の上に置いてある作品をよけようとした。椅子に乗れば、ネコは十分机に届くと思ったからだ。作品に、キズがついたら大変だ。

春は、夕焼けと黒飴ふたつ　０２

キズ……。

わたしの作品ではない。先輩、後輩、同級生の作品だ。わたしの作品はここにはない。

『どうして、美術部に来たの？　たいして絵が上手でもないのに』

『絵を描かずに、どうしてここにいるんだ？　ただ部活に来たいだけなんだろ。だったら、となりの部に行けば』

鼻で笑われ、口でけなされ、描いた作品は破かれた。

一番許せないのは、となりの部、文芸部を何かあるたびにバカにすること。

『人数少ないし、何を活動しているのか分からないよね』

『ただいるだけじゃないの？』

『部室の四分の一もうばっておいてさ』

そのたびに、わたしは、外に絵を描きに行くといって部室を飛び出す。聞きたくない。そんな、汚い言葉。

たしかに、絵は上手い。市で優秀賞や県にいっている人もいる。運動部に負けないくらい、美術部は活発だ。いや、この湖宮中で一番活発かも知れない。顧問の先生も必死で、部員は全員ライバルだといつも言う。

「はあ」　ため息がもれる。まあ、いいや。これも、親孝行だ。うん、そうだ。

わたしは、うんうんと何回もうなずくと、ほほに流れていた液体をふき取って、作品を一番高いところに重ねておいた。

カリカリと音がする。音のほうを向くと、ネコが戸を引っかいていた。しっかりと閉めたはずの戸が少し開いている。

「ああ、だめだよ」　ネコを抱き上げる。鍵、かけておかなきゃ、やっぱりダメかな……。

『部室の四分の一もうばっておいてさ』　さっきの部員の言葉が

よみがえる。
「えっ？」　そうか、文芸部と美術部は、もとは同じ教室だから鍵も同じかも知れない。でも、鍵をかえている可能性もある。一か八か、行ってみようかな……。
文芸部室の戸をガラリと開けた。顔をのぞかせる。あの人が何かを書いている。ああ、作文か。知らない人もいる。一年生だろうか。
「光先輩いますか？　ああ、すみません。鍵、貸してもらえますか」
鍵を借りた。急いで、美術室に戻る。
カーテンのすき間から廊下をうかがう。文芸部員の三人が、帰っていくところを。
「さて……、ここでおとなしくしているのよ。すぐに、もう二匹連れてきますからね」　わたしは、黒ネコにそう言って、美術室に鍵をかけた。
――カチャリ。
よかった。やっぱり同じ鍵なんだ。
わたしは、かけ足で東門へ向かった。あの人に出くわすのも、少し期待しながら。
「……」　いた。東門からもうすでに、何十メートルとはなれているところに。誰かと帰っている。誰？　ジッと目をこらすけど、良く見えなかった。少なくとも女子ではなさそうだ。さっきの知らない文芸部員かな。
「ああっ」　東門が開いている。閉めなかったんだなあ。そういえば、ネコもいない。開いている東門から、出て行ってしまったのかもしれない……。大丈夫かな。
あたりを少し探してみる。やっぱりいない。
他の部が、しゃがんで草をかき分けているわたしを見て、けげんそうな顔をする。
わたしは立ちあがると、もう一度、部室に戻ってカバンを取り、鍵をかけ、南門から帰った。

家に持っていって、飼えたらいいんだけど。
わたしは、黒ネコに思いをめぐらす。
……ダメだ。
家には親がいる。

春は、夕焼けと黒飴ふたつ　０３

次の日、わたしは、朝早く光先輩に鍵を返して、放課後に図書委員の仕事をすませてから、部室に走った。

あのネコ、大丈夫かな……。

部室では、にぎやか、おだやかとは無縁なピリピリとした、いつも通りの雰囲気がただよっていた。ネコの姿は見られない。

「高梨さん、戸は静かに開け閉めしてください。他の人の迷惑を考えて」　部長がわたしに言ってくる。

「あの……、ネコは、どうしたんですか？　あの、黒くて目つきのするどい……」　わたしは、おそるおそる聞く。この部長、苦手なんだよね。まあ、部長に限ったことではないけど。

「となりの部長が、捨ててしまわれました。何で、ご存知なんです？」

「いえ、べつに……。ありがとうございます。ちょっと失礼して……」　わたしは、部長に軽く頭をさげると、部室を飛び出した。廊下に、光先輩の歩いている姿が見えたからだ。

「先輩、光先輩」　わたしは、光先輩を呼び止める。

「あ、薫子。派手なんだか地味なんだか良く分かんないけど、やってくれたわねえ」　ニコニコと笑う光先輩。美術部部長のこんな顔は、みたことない。

「ネコは……？」　まさか、本当に捨てたわけではないだろう。光先輩はそんなこと絶対にする人ではない。

「わたしが、山に返したわ。朝日山公園に。あそこ、野良ネコを世話する人がいるでしょう。その人と話してきたわ。やっぱり、世話していたネコが何匹か湖宮中に来てしまうみたいね」

「そうですか……。よかった。うちの部長が、光先輩が捨てたっていうもんだから……」

「あ、そう。『山に返しておきます』って言ったのを、かんちが

いしたのね」　くすくすと笑う光先輩。
「とにかく、ありがとうございます」　わたしは、深く頭をさげた。
「ねえ、文芸部にこない？」　頭を上げると、真剣な表情の光先輩がいた。
「え……」
「冗談で言っているんじゃないの。文芸部に転部しない？」
「……」

春は、夕焼けと黒飴ふたつ　０４

月曜日、わたしは美術部の前にいた。ネコがいる。金曜日に、東門から出で行ったと思った三毛ネコ二匹。部室の鍵は閉まっている。

「誰？　こんなことをしたのは！　昨日もだったじゃないの」

部長がわめいている。

わたしじゃない……、一体誰が……。

考えられるのは、光先輩。でも、光先輩なら、こんなことせずに、朝日山公園にもっていったことだろう。

「はい、はいっ。ちょっとどいてね」　人ごみをかき分けて、部室の戸の前に立ったのは、あの人だった。

「太一……。どうしたの？」

「うん、ちょっとまって」　太一は、制服のポケットから鍵を取り出して、鍵を開ける。

「どちら様か存知あげませんけど……、どうもありがとう」　部長は、急いで、部室に入っていった。自分のかわいい作品がどうなったのか気になるのだろう。

「よし、おいで」　太一は、よって来たネコを抱きあげた。

「今から、朝日山公園に連れて行く」　そう言って、歩いていった。

「ちょっと待ってよ」　わたしは、太一が持っている二匹のネコのうち、一匹を取り上げる。

「一緒に行くから」

「おう」

「……太一だったの。今日のネコ」

「まあな。日曜にな。で、朝日山のことを部長に聞いたのは、今朝」

「ふーん」　わたしは、太一と並んで歩きつづけた。いろいろ聞きたいことがあるけど、今は……べつにいいや。

湖宮中から歩いて十分ぐらいのところにある朝日山公園という名の山で、野良ネコの世話をしているという老人に三毛ネコをあずけてきた。
「ありがとう」　帰り道、わたしは太一にお礼を言った。
「……」
「え？　何」　太一が何か言ったような気がするけど、小さい声だったので、良く聞こえない。
「黒飴なめたいなあ」
「昔から、好きだねえ」　わたしは、制服のポケットから黒飴を取り出した。

部室に戻ると、部長と顧問の先生に呼び出された。
「高梨くん、君は春の作品展に出展しないのかね？」
「一年生から、一度も作品を描いていないというじゃない？　どういうつもりなのかしら？」
「……先生、佐藤部長、いままでお世話になりました」　わたしは、頭をさげる。
「え？　どういうことかね？」　顧問が、首をかしげる。部長は、わたしに冷たい視線をあびせている。
「転部します。文芸部に」
廊下から、足音が聞こえる。
だんだんと、こっちに近づいてくる。
それの足音は、きっと、春の足音にちがいない。

夏は、暇なコンピュータ　０１

はい、夏休みです。じゃん、部活ありません。どん、宿題山もりです。

湖宮中文芸部は、歴代夏休みは部活動はなし、となっていて、部長も代々守っているらしい。

でも、暇なので、ぼくは毎日部活に顔を出している。ぼくだけじゃない、竹内先輩も、田中先輩も、高梨先輩もだ。

どうして、こんなに出席率がいいのかというと、やっぱりみんな暇なんだろうけど、それだけじゃなくて、高梨先輩がなんとコンピュータが得意だということに、竹内先輩が発見したからだった。以来、わが文芸部は夏休みの間コンピュータ部化しているんだ。

夏休みに入って一週間、高梨先輩から教わったことは、電源の入れ方と切り方だ。うん、これだけは今ならかんぺきにできるぞ。

「それじゃあ、ここをクリックして」

「クリックって？」

こんな感じで、高梨先輩のコンピュータ講習会は進む。

前は、部室の中央にある長テーブルを二つくっつけたものが、ぼくたちの小説を書くところでたまり場になっていたのが、今では、美術部部室側の窓ぎわが、ぼくらのたまり場になっている。そこには、机を二つ並べて顧問の南条先生が持ってきたコンピュータが、二台置いてある。

でも、前と変わらない人物がひとりいる。

竹内先輩だ。

長テーブルのいつもの場所に座って、文庫本を開いている。文庫本にはブックカバーがかけてあるので、何を読んでいるのかは不明だ。

「何を読んでいるんです？」　気になったので、近づいて聞いてみた。

「おっしえない」　竹内先輩は文庫本をパタンと閉じた。閉じる前にチラッと見えた。良く見えなかったけど文字はなかった。イラスト集かな。

「なあ、もうすぐ、文化祭だなあ」　田中先輩が、こっちを向きながら言う。

「何を出す？　部長」

「去年と同じでいいんじゃない」　竹内先輩は、ぼくを追っぱらうと、文庫本を開いた。

「去年は何出したの？」　と、高梨先輩。

「何も。去年は部室もなかったし、小説の小冊子だって作ったことないし」

「へええ、それは、つまらないですねえ」　追っぱらわれたぼくは、椅子に座りながら言う。

「つまらなくないわよ。湖宮中の文化祭は。クラスで大変なんだから」　先輩たちはうんうんとうなずく。

「部活にかまっていられないわよう」　また、うんうんとうなずく先輩たち。

「へえ……、楽しみだなあ。ぼく、文化祭実行委員なんですよ」

「うわあ……ごくろうさま」　三人の先輩たちが同時に言った。

夏は、暇なコンピュータ　０２

「あのねえ、最近妹に相談されるのよ」　竹内先輩が言う。
「何をですか？　って妹いたんですか」　ぼくが聞く。
「ええ、三人兄弟よ。わたしと、弟と妹」　文庫本を閉じる竹内先輩。
「で、何の相談？」　高梨先輩が、両手でキーボードをカチャカチャ言わせながら聞く。すごいスピードで打っている。
「うーんとね、変な人に追いかけまわされているっていうのよ」
「うわあ、ストーカーかよう」　田中先輩が、椅子をかたむけながら言う。椅子をかたむけると、バランスをくずして倒れてしまうんだよね。ぼくはなんども授業中に倒れたことがある。
「光先輩の妹だから、きっとものすごくかわいいと思うね」
「いいえ、わたしと似て、ぶさいくよ。うん。そっくり。年のはなれた三つ子ってよく言われるんだから」
「へえ、弟とも似てるんだ。さぞかし、かっこういいだろうね」
「だから、ぶさいくだってば。まあ、気にするなと言っているけどね。本人もあまり気にはしていないようだし。追いかけっこを楽しんでいるみたい」
「で、相手は誰なの？」　高梨先輩が、キーボードを打つ手を休めて聞いた。
「分からないみたいだけど、湖宮中の生徒だって」
「へえ、ってお前か結人！」　田中先輩の指が、ぼくを指さす。
「何でですか。第一、先輩の妹の顔知りませんてば」　ぼくは、手をぶんぶんふりながら言う。
「湖宮中の生徒だから」
「だったら、先輩だってそうじゃないですか」
「おれはちがう」
「何で」

「何でもだ」

まったく、わけが分からない。

夏は、宿題の山と肝だめし　01

「いえいっ。きもだめしやろうぜー」　わたしは、大きな声とこぶしを空につきたてた。
「ええ、響、何言ってんのよう。怖くて、そんなの無理無理！」
涼香が手をブンブンとふった。
宿題はそこらへんにほおって置いて、夏休み！　頑張って遊ばなくっちゃ。姉ちゃんは、毎日学校に行っているみたいだけど、何やってんだろう？
「響、部活は？」　涼香が聞いてくる。
「そんなのいいの！　ほっとけほっとけ」
「え、いいの。練習試合とか、ないわけ？」
「うっそだよ。部活はあさってから。今日と明日は完全に休みなのさあ！」　わたしは、うんと背伸びをした。風が気持ちいい。
「ね、どこでやる？」
「何を？」
「だから、きもだめしよお！」
「本気だったの？」　涼香が目を丸くした。涼香はわたしの親友。怖がりで、泣き虫で。わたしがいなければ何にもできないの。
「そう。きもだめし、わたしがやらなきゃ誰がやる！」
「そんなの、きもだめし好きにまかせておけばいいよ」
「んじゃあ、わたしね。そうだ！　学校にしよう。夜中にしのびこむの！　うわあ、楽しい！」　わたしは、ピョンと飛び上がった。
「今夜ね、今夜！　八時に西門に集合ね」

わたしは、思わず生つばを飲みこんだ。
うで時計を見ると、八時十分をさしている。この時計は、昨日おばあちゃんにもらったもので、ちょっと手首に合わなくてゆるいけど、とってもかわいい。

「……」　まあ、うで時計のことは置いといて。
夜の学校って、こんなにこわいんだ……。となりで、涼香もふるえている。
湖宮中は、生徒数が多いので校舎はとても大きい。でも、もう四ヶ月ちかくも通っているから、目をつぶっても大丈夫なくらいに、なれているんだと思っていた……。でも、それは、昼間だけ。夜になると、その大きな校舎がわたしたちを吸いこみそうなぐらいに、立ちはばかっている。
「……ねえ、行かないの？」　涼香がわたしをせっつく。あれ？
『もう帰ろうよお』　とか言うのかと思っていたのに……。
「よし、行くぞお。最初は、……教室だ！」　本当は、理科実験室とか言いたかったんだけど、いきなりそれは、ね……。
「うん、それより、学校閉まってないかな……」　うっ、意外に冷静じゃない。そう、まだ入っていないんだからさ。
わたしたちは、校舎にそろりそろりと近づくと、一番近かった窓に手をかけた。スーと音を立てて窓が開いた。わたしは少しがっかりした。窓も扉も開かなければ、残念だねと言って帰ることができるのに。
「戸じまり、しっかりしていないのね。無用心な」　涼香はそうつぶやくと、正面玄関
のところに一人で歩いていった。
取り残されるわたし。昼間も吹いていた風が、生ぬるくて気持ちが悪い。ああ、何でこんなこと言っちゃったんだろ。わたしは、校舎に背をもたれると、空を見た。どんよりと雲がいすわって、星が一つも見えない。もしかしたら、雨が降るかも。

夏は、宿題の山と肝だめし　０２

「……え？　涼香、なにしてるの？」　わたしはつぶやく。今、校舎側からカタリと音がしたような気がした。京香が正面玄関から入ってきた音だろうか。もしそうだとしても、わたしの声は聞こえなかっただろう。自分でもびっくりするくらい、小さな声だったんだから。

「昇降口、開いていなかったよ。他の出入り口も見てみたけど、閉まってた」　涼香がそう言って戻ってきた。わたしは、ビクッとしてふりかえった。

「何、どうしたの」　涼香が聞いてくる。わたしは、たかがカタリと音がしたがけで怖がっている姿を、涼香には見せたくないので、だまっていることにした。でも、あの音は涼香じゃなかった。それじゃあ、なんだったの？

「しょうがない。ここの窓から入ろう。たまたま、ここを閉め忘れたんだね。ラッキィ」　わたしはそう言ってサンダルを手に持って、窓から校舎に入った。涼香もついてくる。

トンと廊下におりると、はだしの足に廊下が冷たかった。

「わあ、涼しい」　涼香がほほえんでくる。わたしも笑った。でも、ちょっと冷たすぎるような……。

「それじゃあ、どこにいく？　とりあえず、教室かな」　わたしは言う。音が反響して、ウワンウワンとひびく。

「うん、言ってみよう」

一年生の教室は、四階にある。けっこう階段をのぼらなくてはいけない。

はだしであるくといつも思う。画びょうが落ちていたら、もしふんでしまったら、痛いだろうなあ。

そのとき、

「ぎゃあああああ……」　と言う声が、階段の上のほうから聞

こえてきた。
「何だろう……」　わたしは後ろをふりかえる。涼香の顔がボヤッと……。
「ひゃあ……！」　わたしは飛び上がった。
「何？　今の声は」　涼香が真剣な顔でわたしに聞いてくる。あ、涼香は懐中電灯を持って　きていたんだ。まったく、それを先に言ってくれないと。
「ねえ、もう帰る？　怖いでしょう……？」　わたしは聞いた。なるべく冷静をよそおって……。
「ううん、のぼってみよう。声の正体をつき止めなくっちゃ」
涼香は階段をのぼりはじめた。涼香って怖がりで泣き虫で……じゃなかったっけ？　わたしは、ぼう然と涼香の後ろ姿をながめた。
もしかして、涼香はお化けにとりつかれてしまったのかも、正面玄関に行ったときに。それしか考えられない。だってこんな涼香は、今までに見たことないんだから。
「……注意しなくっちゃ」　わたしは自分に言い聞かせると、階段をのぼりはじめた。
「誰かが、わたしたちと同じように、学校できもだめしをしているのかもしれないわ」　お化けにとりつかれたかもしれない涼香が、わたしに言う。
「でも、たくさんある夏休みの中で、今日のこの時間に重なるなんてこと、ある？」
「うーん、誰かに言った？　今日学校できもだめしをやるって」
「ううん。涼香は？」
「わたしも。……そうか、もしそうだとしたら、よほど息が合っているのね」
涼香がもっている懐中電灯に照らされた階段は、なぜか不気味に見える。……逃げようか？　わたしは、階段を上りながら考える。涼香を置いて。でも、ひとりで逃げるのも怖いし、お化けにとりつかれていても涼香は涼香。帰るときも一緒でなくっちゃ。

「あれ……。これみて」　涼香が、三階に来たところで、しゃがんで何かを拾った。階段の段になっているかどのところだったのでわたしには見えない。

「ほら……」

それは、画びょうだった。針のところが、みょうに赤い……。

「……血？」　わたしは、おそるおそる目線を画びょうから涼香にうつす。もしかしたら、涼香がお化けに変わっているかもしれない……と思って。でも、涼香は涼香のままだった。良かった。わたしはホッと胸をなでおろす。

「さっきの悲鳴はこれだったのね」　涼香が話す。真剣なまなざしが、怖い。

夏は、宿題の山と肝だめし　０３

「どういうこと？」
「この画びょうをふんだのよ、はだしで。だから、あんな悲鳴をあげたんだわ。普通に上靴をはいていたら、刺さったことすら気づかないと思う。ということは、やっぱり、わたしたちと同じ、きもだめしに来た人ね」
「そうか……。涼香、探偵みたい」　涼香はまんざらでもないようにうなずいて、
「だから、お化けではないよ。足がちゃんとあるんだから」　と言った。
「ふーん」　と、わたしは、関心がないように言った。なんだか、涼香はわたしの心を読んでいるみたいだ。
四階につくと、一番はしの教室にいく。一年一組、わたしたちのクラスだ。
戸をガラリと開けると、そこには、いつもの教室が広がっていた。わたしは、現実につれもどされたようで、ホッとした。なんだか、今までおどおどしていたのが、バカみたいに感じられる。涼香がお化けにとりついている？　はあ、何考えていたんだろう。
「それじゃあ、理科実験室にでも、行ってみる？」　いつもの調子が戻って、調子の乗ったわたしが言う。
「え……、うん、いいよ」　涼香も元の怖がりで泣き虫で……に戻ったみたい。きっと今までのわたしたちは、いつもとちがう学校の雰囲気にのみこまれて、ちょっとかわっていたんだ。きっと、そう。
「理科実験室によったら、そのまま帰ろう。もう、時間もおそいしね」
「うん」
理科実験室は一階にある。

わたしたちは、教室から出ると、廊下を歩きはじめた。三組の前を通ったちょうど、そのとき。後ろのほうで、戸がガラリと開く後が聞こえてきた。物が落ちるカーンという音もする。　三組だろうか二組だろうか。一組には誰もいなかったはず。

わたしたちは、そのまま歩きつづけた。なぜだか怖くて、後ろもふり向けない。

気のせいかな。追いかけてくるような気がする。

すこし足をはやめる。あっちも足をはやめているような気がする。足音は一人じゃない、二人……？

わたしと涼香は目くばせをすると、走り出した。

向こうも追いかけてくる！

どうして？　どうしておいかけてくるの？　わたしは、走りながら考える。

何か用があるなら、声をかけてくるはず。

怖がらせようってのなら、あっちは大成功よっ！

「涼香！　さっき行こうとしていたところへ集合ね！」　わたしは言うと、階段の前を通りすぎた。涼香は階段をくだっていく。つまり、二手に分かれようって作戦だ。理科実験室は、わたしたちが学校に入った窓の近くにある。だから、そこから脱出しようってわけ。

「おいっ」　追いかけてくる人の声が聞こえる。男の人の声だ。あれ？　聞いたことのある声……。どこで聞いたんだろう。

向こうも二手に分かれたみたいだ。一人がわたしを追ってくる。

見ていなさい！　あんたたちの顔を見てやるわ。部活できたえたこの足をなめないで！でも、サンダルを持っているので少しじゃまだ。それは、あっちも同じなはず。それに、片方は足を画びょうでケガしているはずだ。こっちのほうが有利だ。

でも、時々、「あ」　にだく点をつけたような言葉が聞こえてくる。

怖い。

夏は、宿題の山と肝だめし　０４

もしかしたら、ゾンビなのかも。ゾンビなら足があると思う……。
校舎の反対側にある階段をくだっていく。やっぱり、わたしの方が早い。もうすでに、一階分の差がついている。
わたしは、階段の手すりの間から上を見た。やつは階段の真ん中を通っているみたいだ。顔は見えない。
一階についた。向こうがわから、必死に涼香が走ってくる。あっちは、もう並んで走っているみたいだ。涼香を追いかけているやつは、足を引きずっていない。ということは、まだ階段をおりているやつが、足をケガしたのね。ざまみろだ。
「涼香！」　わたしは、先回りして、窓から脱出。サンダルを急いではいて、涼香を待つ。すぐ窓が閉められるように窓わくに手をかけて。
涼香が来た。追いかけている二人はそろって走っている。
「早く！」　わたしは涼香が窓から脱出するのを見て。窓をバンと閉めた。その衝撃で、ゆるかったらしい鍵がカチャンとかかる。わたしと涼香は走った。ムワッとする夏の夜を。
「こ……こまでくれば……。もう……大丈夫ね……」　さすがに息が荒い。涼香はしゃべれないくらいだ。ここは朝日山公園。木がたくさんあるので、森みたい。下手したら、学校よりここの方が怖いかもしれない……。ふくろうの声が聞こえる。何で、こんな街の中の公園にふくろうがいるのよ。
「明日、もう一度行こう」　呼吸をととのえるとわたしは言った。
「……」
「涼香？」
「……な、なんで……」　涼香はベンチへ行くと、座りこんだ。
わたしもベンチに座った。木が風でゆれている。汗がスーと引いていく。わたしは立ちあがると、自動販売機の前に行き、百円を二

枚入れて、スポーツドリンクを二本買った。何故スポーツドリンクかって言うと、他のは、売り切れていたからだ。自動販売機の電気は今にも切れそうだ。わたしはベンチに戻る途中に、缶の賞味期限のところを見た。暗くてよく見えなかったけど、うん、大丈夫。

「はい」　わたしは、涼香にスポーツドリンクをわたす。

「……ありが……とう」　涼香は缶のふたを開けると、いっきにのどに流しこんだ。

「……ふうう」　大きくため息をつく涼香。

「あのね、明日もう一度学校に行こう」　わたしは缶のふたを開けながら、もう一度言った。

「どうして……、あんなに怖かったのに」

「おどろかされっぱなしで終わっていいの？　わたしはいや。今度はこっちがおどろかしてやるの！」　わたしはスポーツドリンクをいきおい良く飲んだ。すると、気管に入ってむせてしまった。

「大丈夫？　わたしもちょっとは、くやしいけど……。明日も来るか分からないじゃない」

「だ……ぶ……、ゲホゲホ……」　わたしは、大きく深呼吸をした。ケホ。

「え？　何」

「大丈夫。絶対に、明日も来るよ。あいつらは」　わたしは立ち上がった。公園の時計を見る。九時を回ろうとしていた。何だあ。学校に入ってから、一時間もたっていなかったんだ。

家に帰った後、姉ちゃんにこのことを話したら、面白がって聞いてくれた。

よおし、明日は学校で、ふくしゅうよ！

夏は、宿題の山と肝だめし　０５

次の日の朝、わたしと涼香は店で、画びょうとクラッカー、それにガムテープ、細いひもを買った。

画びょうの針はちゃんと切っておく。やっぱり、痛いだろうし。

これで準備はオッケイ。

「ねえ、昨日、あの窓だけが開いていたのは、あの人たちが最初に開けたからじゃないかな」　涼香が画びょうの針を切りながら言う。針は危ないので、ガムテープにくっつけて、いらないタオルに包んで捨てることにした。あ、でも燃えるごみに出していいんだろうか。危険物かも。あとでちゃんと調べてみよう。

「ああ、そうか。それじゃあ、あの人たちよりも早く行かなくちゃいけないから、学校に行って、窓を開けてきたほうがいいかな」

わたしはクッキーをつまみながら言う。

涼香が時計を見る。わたしもつられて時計を見た。涼香の部屋の時計は、文字が小さくて針が細いから、見にくい。きっと、実用性よりデザインを重視しているんだ。わたしは、学校の時計のようなシンプルなやつが好きだなあ。あ、そういえば、今日はうで時計をしてこなかった。はあ、少し残念。

「……五時かあ。半ころになったら、行く？」

「そうだね。行こう、行こう！」　わたしは、なんだかうきうきしてきた。針なし画びょうは上手くいくのか。クラッカーは？

来た……！

わたしたちは、理科実験室の戸のほうにすわっている。べつに隠れてはいないけど、誰かが入ってきても、真っ暗だから見つかる心配はないだろう。

昨日とはちがって、全然怖くない。きっと、人をおどろかせる立場にいるからだろうなあ。

昨日、わたしたちが逃げかえった窓から、物音がする。わたしと涼香は顔を見合わせた。きっと、あいつらはこっちにくるだろう。窓からここの理科準備室までの廊下にばらまいた針なし画びょうを追って。

「……うわっ。何だこれ」　声が聞こえてきた。声は昨日聞いた声と同じ。やっぱり、今日も来たのね！

「ねえ、何で分かったの？」　涼香が小声で聞いてくる。暗くて顔はよく見えないけど、おどろいているのが分かる。きっと今まで、信じていなかったんだろう。

「まあまあ、あとで顔をゆっくり見ましょう」　わたしは、涼香に見えているか分からないけど、すました顔で答えた。

意外と早く、理科準備室の戸に手をかける気配がする。画びょうに針があるんだと思ってゆっくりと歩いているんだろうと思っていたのに。特に昨日、針を足に刺しちゃった人は、ビクビクものだろうと、期待してたのだけど。

「あ、スリッパとかをはいているんじゃない？」　涼香が行った。ああ、なるほど。敵もあっぱれだな。うんうん。でも、ここからが本番！　ああ、何だか、わくわくする。

カラリ。と音がして、戸が開いた。と、同時に戸につけてあった糸がピンとはる。

「……おっ、何だあ」　つまずく二人。その拍子に足から何かが飛んだ。たぶんスリッパだ。よろけて足と手が前に出ているのが見える。今度は、ガムテープのくっつく部分を表にしてはったところに足と手がくっつく。

「……うわあ。ったく、誰だよこんなことしたのは」　二人はあばれている。さらにくっつくガムテープ。

「せーのっ」　わたしと涼香はクラッカーを打った。

パーンという音にビクッとする二人。

やった！　大成功！

わたしは、壁にあるスイッチをおした。

夏は、宿題の山と肝だめし　０６

明るくなる教室。

「透くん！」　涼香がさけんだ。そしてわたしのほうを見る。そう、昨日わたしたちのことを追いかけてきた二人のうち一人は、わたしの双子の兄、透だったの。双子だから、考えることが同じなんだよね。

もう一人は……。

「誰？」　わたしは、ガムテープにもがいている、もう一人を指さして、透に聞いた。

「……いいから、このガムテープ。なんとかしろ」　その声は、怒りをふくんでいた。わたしと涼香は急いで、透ともう一人の救出作業にかかる。手はべとべと、頭はクラッカーの紙ふぶきだらけ。見た目は、すっごく笑える二人なんだけど、二人ともだまってわたしたちをにらみながらガムテープを取っているので、笑いをこらえるのに必死だった。

「……はい」　なんとか二人を救出すると、もう一人の鈴木くんはわたしに手をつきだした。

「……何？」　わたしはポカンと透を見る。透はあきれた顔をすると、「良く見てみろ」と言った。

「え……」　その手の上に乗っていたもの……。わたしのうで時計だった。

「何で？　どうして？　家にあるはずだよ」　まさかこの人、マジシャンなのかな。

「ばーか。昨日落としたんだろう。響、お前、怖がって落としたことも気づかないでやんの」　え？　なんのことだろう……。首をひねった。ひねっても、何も思いだせない。透はわたしを、ジトッとした目で見る。

「あー！　そうだ。思い出した。ほらほら、教室から出たとき、

カーンって金属が落ちる音が聞こえていたじゃない！」　涼香がさけんだ。
「えー、そうだったけ？」　わたしはまた首をかしげた。と、そのとき、思い出した。一組の教室を出て、廊下を歩いている途中、カーンという音がしたことを。そうか、ゆるかったから、落ちちゃったんだ。
「あの……、うでが疲れちゃったんだけど……」　コホコホとせきこむ鈴木くん。
「あ、ごめん」　わたしは鈴木くんから、うで時計を受け取った。そして、わたしは涼香と顔を見合わせると、頭を下げた。
「時計を拾ってもらったのに、こんなことしてごめんなさい」

それから、わたしたち四人は、廊下に落ちている針なし画びょうとガムテープ、クラッカーの紙ふぶきなどの回収に取りかかった。
画びょうをほうきではきながら、わたしは透に言った。
「昨日、声をかけてくれればよかったのに。だまって追いかけてくるもんだから」　ちりとりを持っていた透は、頭をかくと言った。
「じつはおれ、最初は鈴木が怖がらせようとして追いかけているんだと思って、走ったんだけどさ。時計を拾ったのを気づいたのは、今日、学校に来る前だ。鈴木のやつ、画びょうが足に刺さっちゃってさ、思いっきりさけんだ後だから、声がかれちゃって出なかったんだってさ」
「へえ……。それはかわいそうねぇ……」　わたしは少し笑った。あーあ、なんだかとっても疲れちゃった。でも、楽しかったなあ。
分かったことが二つある。
一つは、わたしは意外に怖がりだっていうこと。
もう一つは、涼香が意外に頼もしいということ。
まあ、結局はお化けもゾンビも、この学校にはいなかったんだよね。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　01

二学期が始まったとたんに、文化祭実行委員が呼び出された。
ぼくは、一年五組の文化祭実行委員だ。四月に委員会を決めるとき、体育委員や保健委員とちがって、短期間で終わるから楽だろうなと思ってこの委員会にしたんだけど……。
夏休みの先輩たちの言葉がよみがえる。なんか、大変そうだよなあ。
「はあ」　ぼくは、文化祭実行委員が集まる教室へ歩きながらため息をついた。
「どうしたの？」　同じ委員の木野が首をかしげる。
「いや、何でもない」　ぼくは、考え直す。先輩たちは、ぼくをおどかそうとしているにちがいない。うん、きっとそうだ。
教室についた。戸を開ける。
えっと、どこに座ろうかな……。ぼくは、パラパラと座っている教室を見わたす。
「あれっ」　一番後ろの窓ぎわの席に、竹内先輩が座っていた。肩ひじをついて外をながめている。
「なんだあ、先輩だって実行委員だったんですね」　ぼくは、となりの席に座りながら話しかける。木野は、となりのクラスの佐竹と前の席に座る。
「……ちがう。生徒会だからよ」　ぼくの方を向く竹内先輩。その目にはすでに疲労の色が……。そういえば、生徒会副会長だって言ってたっけ。
「はい、静かにして下さいますか。ええ、では、文化祭実行委員会をはじめたいと思います。わたくしは、生徒会会長で美術部部長、今回の委員長をつとめさせていただきます、佐藤沙貴絵と申します」
佐藤委員長は、静かに一礼した。何か、拍手しないといけないような雰囲気がただよう。パラパラと拍手の音がする。佐藤委員長はつづける。

「副委員長は、生徒会副会長で文芸部部長の竹内光さんです」
大きな拍手がおこる。竹内先輩は、ニッコリとほほえんだ。拍手がさらに大きくなる。
「お静かに！　みなさまをお呼びいたしましたのは、他でもありません！　湖宮中文化祭まであと一ヶ月を切りました。文化祭は、他の学校や町の方たちに、湖宮中の良さを知ってもらうゆいいつの機会なのです！　この機会を逃してはいけません！　すばらしい文化祭をわたくしたちの手で、作っていこうではありませんか！」
教卓をバンッとたたく佐藤委員長。
「なんか、選挙演説みたいですね」　ぼくは、竹内先輩に耳打ちする。
「そうよね……。なんか、大きなあくびが出てきそうよね」　そういって、本当にあくびをする竹内先輩。佐藤委員長は見逃さない。
「竹内さん、とても暇そうなので、きっちりと湖宮中のために副委員長として頑張ってもらいましょう」　『副委員長』の『副』を強調していう佐藤委員長。
「はいはい」　手をヒラヒラとふる竹内先輩。
「まっ」　目を大きくする佐藤委員長。なんか、マンガに出てきそうな人だな。
「それでは、これからの行動について、説明させていただきます……」　竹内先輩は立ち上がって教壇に立つ。
「ちょっと、それ、わたくしの仕事ですわよ！」
「さっき、わたしに頑張ってもらうって言いましたよね、会長」
『会長』の部分を強調して言う竹内先輩も負けてない。
佐藤委員長は、おしだまって椅子に座った。
「……それでは、続けます。一年生は文化祭の前日、体育館の装飾が割りふられていますので、前日までに、装飾の用意を。会長、プリントを一年生に配ってください。そのプリントに詳しく書かれていますので、それを見て作ってください。分からないところがあれば、私か会長に。二年生は……」　佐藤委員長は、だまって席を

立つとぼくたちのところに来て、プリントを配りはじめた。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　０２

「ねえねえ、葉子、何で竹内先輩が会長にならなかったのかな？」

ぼくの前の席で、木野と佐竹が小さな声で話をはじめる。

「うん……。どう考えたって、竹内先輩の方が似合っているよねえ」　クスクス笑い出す二人。

「選挙で決まったことですわ」　二人の前に、プリントを置く佐藤委員長。ここからは顔が見えないけど、木野と佐竹の顔は恐怖で引きつっていることだろう。とくに木野は美術部だからなおさらだ。

「会長、静かにしてください。――各クラスの出し物または、展示品、模擬店の届けは来週の月曜までに私か会長に提出してください。それでは、以上です。会長、何か足りないことはありますか？」　プリントを配り終わった佐藤委員長は、今まで座っていた席に戻ると言った。

「いいえ、ありませんわ。おみごとですわね。副会長さん」

「ありがとうございます。会長」

一触即発ってこのことを言うんだろうね、きっと。

委員会が終わると、ぼくは、そのまま部室へと向かった。となりを歩いている竹内先輩は、ぶつぶつと何かを話している。

「まったく……、沙貴絵のやつは……」

「つきましたよ、部室。どこ行くんですか？」

「あっそう、気づかなかった。沙貴絵のせいだわ」

「ははは……」

「笑いごとじゃないのよう」

「はい」

部室に入ると、田中先輩と高梨先輩がコンピュータをしていた。

夏休みから、田中先輩は熱心にコンピュータを高梨先輩に教わっているけど、あまり進歩は見られないみたいだ。今だって、コンピュータゲームをしている。これじゃあ、コンピュータで小説を書く日は遠いなあ。

「おかえり。どうだった？　佐藤会長は」　田中先輩が聞いてくる。目が笑っている。

「ただいま。……すごかったですよ。選挙演説みたいで。竹内先輩、かっこよかったなあ」　いつの間にか、部活に来たときのあいさつが、『おかえり』と『ただいま』になっている。なんだか、家に帰ってきた感じがするのは、言いすぎじゃないかも知れない。

「すごいんだ。佐藤会長はよう。生徒会選挙のときは、ものすごい剣幕でさ」

「へえ」

「佐藤部長が会長になれたのは、美術部員のおかげよ。五十人以上もいるんだから。あとは、入ったばかりの一年生ね。佐藤部長のこと何も知らないから、その剣幕におされて投票しちゃったのよ」

高梨先輩が、腕くみをしながら言う。

ぼくは、六年生になる前から、竹内先輩のことを知っていたので竹内先輩に投票した。うーん、でも、まわりのみんなは佐藤委員長に投票してたかな。竹内先輩には負けるけど、佐藤委員長もメガネが似合う美人だし。

竹内先輩は、パイプ椅子にドッカリと腰を下ろすと、カバンから文庫本を取り出し、ながめはじめた。

「とにかく、がんばってね。結人くん」　高梨先輩が腕をくんだままほほえむ。

「部長は、三年目だからなれているだろうけど、大変だねえ、ゆうくんは」　田中先輩はヒッヒと笑った。ああ、先が思いやられる……。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　０３

次の日、ぼくは朝、木野と教壇に立っていた。
「文化祭について話し合いをしたいと思います。クラスでは、何をやりたいですか？　去年の先輩たちは、模擬店だと喫茶店やお化け屋敷、売店など。展示品では、クラスのみんなで、ちぎり絵を作成したりしています。体育館での出し物は、歌、ダンス、劇を行っていたようです」　木野がスラスラとプリントを見ながら、しゃべる。ぼくは、黒板に向かって、みんなが言った意見を書きとめる準備。といっても、チョークを持っているだけだけどね。
「クラスでって……、必ず何かしなくちゃいけないの？」　野澤が言う。
「そうです。必ず何かをすること。これは、決まりですね」
「それじゃあ、喫茶店でいいんじゃないの？」　ぼくは、黒板に『喫茶店』と書く。漢字がなかなか思い出せなくて苦労したけど。
「それより、お化け屋敷がいいわ。楽しそう」
「んんー、それは準備がかかるから、単品で何か売ったらどう？　ポップコーンとか玉コンとかさ」
「玉コンは、何かなあ……。ポップコーンに一票！　あ、おでんもいいかも」
「展示品はパス！　準備に時間はかかるだろうし、見る人もあんまりいないと思うの」
「ええっ、おれ、今、野球選手の写真展示会を提案しようと」
「なにそれ。よろこぶのは、おまえだけだろ」
「劇がいいわあ。ほら、文芸部もいるし、演劇部もいるわ」
「ええ、ぼく、演技なんて……」
さまざまな意見が飛び交い、ぼくは必死に聞きもらすまいと、耳をそばだてて、チョークを走らせた。

で、結局決まったのは、『お化け喫茶でポップコーンと玉コンとおでんを売る野球選手』の劇になった。脚本は、当然のようにぼくに決まってしまい、演劇部の野澤と亀塚が、主役ということに決まった。

「よおおし、がんばるぞお！」　亀塚が、大きなこぶしをふりあげて叫ぶ。クラスのみんなは、オーと席を立って叫んだ。木野は、用紙に決まったことをメモしている。

ぼくは、ひとり、ゆううつだ。

一体、『お化け喫茶でポップコーンと玉コンとおでんを売る野球選手』の脚本って、どう書けばいいんだよう……。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　０４

放課後、部活で竹内先輩に、文化祭のクラスの出し物の用紙を提出した。

「へえ、劇をやるのね」

「どんな？」　高梨先輩が聞いてくる。

「それが……」　ぼくは、今朝の一部始終を話した。すると、大爆笑がおきた。一番笑っているのは、田中先輩だ。

「先輩……。そんなに笑わなくたって……」

「これが、笑わないでいられるかっ。『お化け喫茶でポップコーンと玉コンとおでん……』」　吹きだす田中先輩。

そのとき、部室の戸が、ガラリと開いた。

「静かにしてくださいますか？　今、美術部は文化祭に向けて、共同制作をしていますの。文芸部は今年も何もしないと、うかがっておりますので、美術部の協力をしていただきたいものだわ。静かにするくらい。幼稚園の子でもできるはずです！」　言うことをいうと戸をピシャンと閉める佐藤委員長。

「共同制作ねえ……」　高梨先輩がコンピュータをカチャカチャとたたきながら言う。

「あの美術部にできるのかしら」

「ふーん、そんなに、協力性がないのか？」　田中先輩が聞く。もうコンピュータはさわっていない。ゲームにあきたのかな。

「ええ、まあね……」

「あ、そうだ。沙貴絵にこれ渡しとかなくちゃ……」　竹内先輩はそういうと、ぼくがさっき渡した用紙を手に持って、部室を出て行った。

「あ、佐藤委員長に渡すなら、ぼくが持っていったのに」　と、ぼくが言う。

「いや、部長も気なったんじゃないの？　美術部の共同制作」

「もしかしたら、佐藤部長が文化祭の雑用係なのかもね」　笑い合う二年生の先輩たち。
「はあ」　ぼくは、ため息をつき、カバンから原稿用紙を取り出した。『お化け喫茶でポップコーンと玉コンとおでんを売る野球選手』の脚本を少しでも書かなければいけない。しめきりが十日後だし、何も考えがうかばないけど、何か書けばため息をついているよりはましだ。と考えたからだ。
まず、お化け屋敷だな。入ったことないから分からないなあ。ポップコーンと玉コンとおでん……コンビニみたいだ。それで、店員が野球選手で……。そうか、コンビニみたいな喫茶店の野球選手が店員の……。
ぼくは、ぜんぜんまとまりがないけど、何かしら原稿用紙に書いているとき、竹内先輩が戻ってきた。
「すごかったわあ、うん、本当にすごい」　戸を後ろ手で閉めながら、竹内先輩が言う。
「へえ、やっぱり、美術部、佐藤会長、だもんなあ」　田中先輩が、マンガ本を閉じながらうんうんとうなずく。
「そうなの。もう大乱闘よ。一つのテーブルに、五十人と集まって、あーだこーだと大さわぎ」
「え？　そっちのすごいなんですか。てっきり、絵が上手いもんだと」
竹内先輩は、パイプ椅子に戻ると、文庫本を開いた。
「上手いだろうけど、あの調子じゃあ、作品に取りかかるのはまだまだね」
「やっぱりね。そうだと思った」

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　０５

十一日後、ぼくは、なんとか　『お化け喫茶でポップコーンと玉コンとおでんを売る野球選手』　の脚本を完成させた。題名は　『不思議な客人たち』　。しめきりに一日おくれたので、みんなからブーイングがおきたけど、できないよりはいいだろ。と叫んで、丸くおさまった。

その日の放課後からが、大変だった。役決めや、裏方を決めたりして、放課後毎日残った。でも、みんなはじめての文化祭なので楽しそうだった。

主人公の野球選手の役を亀塚。お化け喫茶で働くアルバイトの女子高生役を野澤。その店にやってくる客人たちを、他のみんなが受け持った。ぼくは、やることはもうやったので、裏方の仕事をちょこちょこと手伝うことにした。

他のクラスも、いろいろな出し物を企画しているみたいで、廊下を歩くと自然とワクワクする。となりのクラスは、手品ショーをするみたいだ。黒いマントをはおった人がいる。お化け屋敷もあるなあ。当日行ってみようかな。でも、みんなは、クラスばっかりかまってまいられない。部活の展示もあるのだ。とくに木野は、劇で小学生の役と、部活での共同制作、委員会の仕事で、てんてこまいだ。美術部での共同作業が一番大変らしい。

「さあ、次は、たこ焼きを買いに来た中年のおばちゃんのシーンだよ！」　野澤がメガホンを片手に大声を出す。普段のめんどうくさそうな態度とちがって、いきいきとしている。

「はいはいっ。分かりました、監督！」　お調子者の渡辺が敬礼をしている。

「あんた、このシーンに関係ないでしょ」　高橋が段ボール箱を、渡辺におしつけながら言う。

「はい、スタートッ」

扉を開けるふりをして、横山が　『お化け喫茶　裏飯屋』　に入ってくる。ベル役の鈴木がカランカランと手に持ったベルを鳴らす。
「成田のおっちゃん、あんた昔、野球選手だったんだってねえ」
ダンボール製のカウンターに近づき、話しかける横山。
「ああ、そうだよ」　亀塚がコーヒーカップを拭くふりをしながら答える。
「カットッ。ダメだよ、明日香。もっと、中年のおばちゃんみたいにならなきゃ。いまのじゃあ、ただの女子中学生が中年のおばちゃんの演技をしているみたいじゃない！」　野澤が、メガホンと台本をふりまわす。
「だって、わたし女子中学生だもん。そうなるのはあたりまえじゃない！」　横山が反論する。
「中年のおばちゃんになるのよ！　それが、演劇なのよう！」
横山の反論は、今の野澤には通じない。
「はい、もう一度やるわよう！」
「それじゃあ、ぼくは、会議室に行って来るね」　ぼくは、横にいた坂井に言うと、教室を出た。これから、委員会の仕事だ。体育館の装飾の飾りを作る。すぐ終わるだろうと言うことで、当日の一週間前の今日から準備がはじまる。木野は部活に行っていてこられないと言っていた。
会議室につくと、一年生はなんと二人しかいない。七クラス二人ずつで十四人いるはずなのに。
「こんなに少ないの？」　ぼくは、となりのクラスの透のとなりに座りながら聞く。
「他のみんなは、部活だよ。美術部」　ピンクの大きな紙に　『化』　とかわいい字で書きながら透が言う。
「ええっ、十一人も美術部なの？」
「そうさ、なんてったって佐藤会長が委員長だからな。はい、おまえは　『祭』　の字を書けな。きれいに書くんだぞ」　黄緑色の大きな紙を渡される。ぼくは、テーブルの真ん中にあるペンを取る。

「三人で、体育館の装飾をするの？　一週間でできるかなあ」
ぼくは、向かい側の席に座っている名前の知らない女子を見る。うす黄色の紙に『文』と書いていた。
「まあ、なんとかなるんじゃないか。美術部のやつらもまったく来ないってことはないだろうしな。いざとなったら、助っ人を頼めばいい」
「助っ人？　みんな忙しいよ。ひきうけてくれるかなあ……」
「大丈夫。もう頼んどいたよ」
「誰を？」
そのとき、会議室の戸がガラリと開いて、竹内先輩が顔をのぞかせた。
「やあ、ちゃんと働いてる？　弟たちよ」

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　０６

弟？　一体どういうことだろう。

「ああ、姉ちゃん」　透が竹内先輩のほうを見る。

「え、もしかして、透と竹内先輩って兄弟？」　ぼくは、竹内先輩と透を見比べる。良く見ると、竹内先輩とそっくりだ。

「そうだよ。竹内透。知らなかったのか？」　透は幼なじみで、家にも遊びに行ったことがある。そうだ、家にお姉ちゃんもいたぞ。それが、竹内先輩だったのか……。あれ、そういえば、もうひとり、家にいたような……。

「知ってたけど、知らなかった……」

「は？」

「で、わたしは何をすればいい？」　竹内先輩は、知らない女子のとなりに座る。「あいかわらず字が下手ねえ、響は」竹内先輩が、くすくすと笑い出す。

「もう、これは下手じゃなくてくせ字よ、姉ちゃん」　響と呼ばれた子が、ほほをふくらませた。ぼくは、透に聞く。

「もしかして……、双子？」

「ああ……、おまえ、家に遊びに来たとき何見てたのさ」

「さあ……、本当に、何見てたんだろ」　そうか、この響って子が、ストーカーされているって言う……。うん、たしかに、竹内先輩と年のはなれた三つ子だ。良く似ている。

「ほらほら、手を動かしなさい。テキパキとね」　竹内先輩がニコニコと笑いながら言った。

文化祭の三日前、やっと　『文化祭』　という大きな紙と、大量の鳥の絵　（これは、ほとんどぼくが書いた）　と、大量の色紙を落ち葉の形に切ったものなど、たくさんの飾りができた。それを、体育館に持っていって、バランスよくはり付けなければならない。

竹内先輩は副委員長だから一年生ばかりにかまっていられない。

他の学年も見て回らなくてはいけないし、響は部活の練習があるから、と行ってしまった。だから、ぼくと透だけで、この広い体育館の飾り付けをしなくてはいけないのだ。
「大変なことになったなあ」　体育館の広い空間の真ん中辺を見つめて、透がつぶやく。
「うん」　ぼくは、うなずくしかない。
はたして、終わるんだろうか……。
「ボゥとしてもはじまらない。チャッチャとかたずけよう」　そでをまくる透。大そうじをするんじゃないんだから。
「誰かに、助っ人を頼む？」　袋に入った飾りをガサガサと出しながら、ぼくはいう。
「文化祭の三日前に、暇な人なんていないよ」　はあ、と大きなため息をつく透。ぼくも大きなため息をついた。これから、大変な作業が待っているというのに、今から疲れていていいんだろうか。
「じゃあ、結人は上の方から。おれは、下の壁のほうから」
「分かった」　ぼくは、うなずくと、いったん体育館の入り口に戻った。そこから、体育館の内側にあるベランダみたいなところにのぼる階段があるんだ。
大きな袋と飾りをはるセロハンテープをもって階段をのぼっていく途中にふと下を見た。
「ん？」　誰だろう。ジャージを着た人が、体育館の入り口のところでキョロキョロとあたりを見渡している。誰かを探しているんだろうか。ぼくと目が合った。その人は、とてもびっくりしたみたいで、文字通り飛びあがると、そそくさと去って行った。ぼくは、首をかしげると、残りの階段をのぼりはじめた。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　07

ぼくは、高いところが好きでも苦手でもない。東京タワーのてっぺんにのぼれば、ちょっとは怖いかもしれない。そんなところだ。でも、透はちがう。ちょっと高いところにあがるとすくみあがってしまうんだ。このまえ、一緒に湖宮市で一番高いビルの屋上に行ったことがある。たかが、十五階ちょっとのところだ。たしか、そこに買い物に出かけたんだ。新しいショッピングセンターで、エレベーターがガラス張りになっている。それに乗ったとたん、透はしゃがみこんでしまった。しかも、そのエレベーターは屋上の直通と来た！　乗るエレベーターをまちがえたんだ。もう、気絶寸前で、足はがくがくして。もう、ぼくは吹き出しそうだった。

下をのぞき見ると、透はせっせと飾りをはっていた。透が届かないところは、ぼくが脚立に乗ってはらなきゃいけないな……。

ベランダみたいなところから、はっていくことにする。

手を伸ばしすぎて、落ちそうになった。

「おっと！」　何とか落ちずにすんだ。

「あぶないなあ。何してんだよう」　透がぼくを見上げて、声をあげる。顔が少し青い。

「だいじょうぶ！　だいじょうぶ！」　と言いつつ、今度は飾りを落としてしまった。

「おおいっ。だいじょうぶかあ」　透が走って飾りを取っているのが見える。

「ごめん、ごめん。それ、下のほうにはっといて」　ぼくは、頭をかきながら言う。まったく、どうしちゃったんだろう……。

「おうおう、やってるなあ。ねえ、あの人、誰？」　竹内先輩が顔をのぞかせた。なんと、佐藤委員長も一緒だ。美術部の共同作品終わったのかな。

あの人？　ああ、さっきぼくと目が会った人かな……。まだいた

のか。なにしているんだろう。
「いいえ、まだ部員が作業をつづけていますわ。光に無理やりつれてこられたんです」
「だって、見てみろよ、沙貴絵。一年生が二人だけなんだ。響だって本当は前々から部活の準備をしなくちゃいけなかったのに、無理してきたんだ。まあ、暇な透と結人はちがうけど」暇なぼくたち二人は、竹内先輩と佐藤委員長の言い合いをながめていた。
少しでも手を動かしたほうがいいだろう。ぼくは、のろのろと手を動かしはじめた。
「ケンカしてないで……。手伝いに来たんなら、手伝ってください」　透が話している声が聞こえる。
「ケンカなんてしてないわ。手伝いに来たのよ。ほら、沙貴絵は二階を手伝って」
「……」　佐藤委員長は、だまってぼくのところへ来る。
「あ、これ、お願いします」　ぼくは、自分がやる分を袋から取り出して、袋を佐藤委員長に渡す。
「ありがとう……、……」
「え？　なんですか？」　ぼくは聞きかえす。何か言われたような気がした。
「いいえ、なんでもありません。それでは、わたくしはあちらから……」　佐藤委員長は袋をぼくから受け取って、ぼくのいる反対側に歩き出した。
下を見ると、竹内先輩が脚立に乗って、壁の上の方にぼくの描いた鳥の絵をはっていた。透は、脚立の足元でうろうろとしている。姉のことが心配なのか、自分が脚立に乗った姿を想像しているのか、ここからでも分かるぐらいに、真っ青だった。
「透っ！　早くやれよう！」　ぼくは叫ぶと、飾りをはる作業に没頭した。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　０８

文化祭当日。

「今日と明日、頑張っていきましょう！」　亀塚が教室で大声を上げる。みんなはオーと叫ぶ。この光景、前にも見たような……。

「頑張ろうね。ゆうくん！」　千坂が笑いかけてくる。ぼくも、ほほえみかえした。昨日放課後遅くまで、体育館に残っていたから、疲れがたまっている。

「公演は午後からです。十二時半までに体育館に集合してください。それまで、文化祭を楽しみましょう！」

ぼくは、まず美術室に行ってみることにした。共同制作が気になる。

美術室に行く前に、お化け屋敷によった。ちょっと怖かったけど、たかが作り物。まったく怖くなかったと、強気に言っておこう……。

「わあ……」　一辺が二メートルはありそうなキャンバスに学校の風景が、描かれていた。文化祭を準備する顔がたくさん、油絵の中に入っている。知った顔も中にはいる。メガホンを持っている野澤の顔もあった。竹内先輩の顔も。ジャージ男も。屋上にたたずむマジシャンの黒マントも。未完成のお化けたちも。

ここに、文化祭の湖宮中全部が描かれている。

「すごい……」　ぼくは、全身に鳥肌が立つかと思った。さっきのお化け屋敷とは、ちがう鳥肌だ。

「佐沼くん、来てくれたんだね」　木野が話しかけてくる。心なしか顔が青い。

「うん。すごいね。これを一ヶ月弱で書きあげたの？　さすがだね」　ぼくは言う。

「ありがとう……」　と言って、木野はくずれるように倒れた。

「木野！　大丈夫か」　ぼくは、木野をかつぐと保健室に行こうとした。

「ああ、大丈夫だよ。木野ちゃんは強いから」　テーブルに腰をかけている先輩たちが、笑いながら見ている。
「え……」
かついでいる木野は、ズッシリとだんだん重くなって、あぶら汗が出てきていた。ぼくは、先輩たちを無視して、保健室へいこうと廊下へ出た。
「どうしたの？　葉子ちゃん！」　高梨先輩が、かけつけて来てくれなかったらきっと、ぼくも倒れそうになっていたと思う。
「急に倒れたんです。保健室に連れて行こうと思って」
高梨先輩は無言でうなずくと、木野の肩に手をまわした。
「ああ、高梨ちゃんだ。文芸部は楽しいですかあ？」　後ろから、さっきの先輩たちの笑い声が聞こえる。高梨先輩とぼくはだまって木野を保健室へと運んだ。

「――熱が高いわね。それに貧血をおこしている。今日は早退したほうがいいわね」　保健の先生はそう言うと、木野をベッドに寝かせた。
「木野さんの家に電話して迎えに来てもらうから、ちょっとここで木野さんのこと見てくれる？」
「はい」　ぼくと高梨先輩は、木野が寝ているベッドの横にある椅子に座った。
「……高梨先輩、佐沼くん、ごめんね。わたしは大丈夫だから、文化祭……楽しんできて」
「いや、いいよ。べつに行きたいところもなかったし」
「わたしも」
「そう、ありがとう……」　そういうと、木野は布団に顔をうずめて泣き出した。
「どうしたの？　……まあ、なんとなく分かるけど、大林たちね」
木野は首を横にふった。
「大林って？」　ぼくは聞く。

「三年の先輩。ほら、さっきの」　ああ、あのテーブルに腰かけていた先輩たちか。
「部長……じゃないわよね」　木野はまた首を横にふった。
「なんでもない……。なんでもないんです。ただ、わたしが勝手に倒れただけです」
「そう……」　そう言って、二人ともだまってしまった。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　09

ぼくは、窓から外を見た。校庭が見える。たくさんの人が、笑顔で屋台を見て回っている。

「あ、そうだ……。劇、どうしよう」　木野が、突然つぶやく。そうだ、木野は、おじいちゃんに連れられて　『お化け喫茶　裏飯屋』　にくる小学生の孫の役だった。身長が女子の中では一番小さい木野をイメージして作ったんだ。

「代役、頼めない？」　木野が、ぼくを見ながら言う。

「ええ、ぼく？」　そりゃあ、身長は木野とたいして変わらないけど……。

「そうだよ。結人くん。衣装はちゃんとあるんでしょ？」　高梨先輩が聞いてくる。

「ええ、でも、スカートなんてはけないし……。それに、髪だって短いよ」

「髪の短い女の子だっている。現にわたしがそうじゃない。スカートだって、一生に一度は、はいてみたら？　貴重な体験ね」

「いやです」　ぼくは、言い訳が聞かないとみて、きっぱりと断ることにした。

「……でも、他の人に頼んでも、すぐにはセリフが覚えられないと思うの。脚本を書いた佐沼くんなら、ね」　木野が、弱々しい声を出す。

「そうだよ。葉子ちゃんの言うとおり。はい、決定。これ以上の代役はいないわ」

保健の先生が戻ってきた。ぼくは、保健の先生に助けを求める。

「あら、いいじゃない。目もくりんとしててかわいらしいし、女の子の服装をすれば、女の子よりもかわいいんじゃないかしら」

「そんなあ……」　ぼくはがっくりと肩を落とす。

「そうですよね。そうですよね」　高梨先輩は、ぼくの肩をたた

いた。
「佐沼くんが劇に出るの？　へえ、わたしも見ようかしら」
「ありがとう、助けてもらった上に、代役までさせちゃって」
「ぼく、まだやるっていってないよ……」
「あ、そうそう、木野さんの家に電話したんだけど、留守電になっていたのよ。先生の車で家まで送っていきましょうか？　でも、家に誰もいないんじゃあ、帰っても大変よねえ」　先生は、うーんと考えこむ。ぼくも考える。この危機的状況をどう乗り切るか……。
「いえ、もう少し休ませてもらって、歩いて家に帰ります」
「いえ、ダメよ。熱がある子を、歩かせるなんてできないわ。ここで寝ていなさい。何時間かたったら、また家に電話をかけてみるから」
「あ、ここにいた。葉子、どうしたの？」　野澤が、保健室に入ってくる。
「莉子……」
高梨先輩が、野澤に木野が熱を出して、劇に出られないことを話した。
「それじゃあ、代役は佐沼くんね」
「やっぱり？　そうだよね」　高梨先輩が、うんうんとうなずく。
「演劇部の目に狂いはなし！」
「そんなあ……」
「じゃあ、佐沼くん、衣装を着てみましょうか」　ぼくは、野澤に引きずられて保健室を出る。
「いってらっしゃーい」　高梨先輩が、手をふっている。ああ、なんでこんなことになっちゃったんだろう……。情けは人のためならずじゃなかったのか……。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　１０

教室に行くと、クラスメイトの数人がいて、ポップコーンや玉コン。たこ焼きにおでんを買ってきていた。

「あれ、劇に使うのはダンボールで作ったやつじゃなかったの？」

ぼくは聞く。

「うん、そのつもりだったのだけど、文化祭をみんなで回っていたら、劇で使うものが全部売っていたんだ。だったら、本物を使ったほうがいいだろうって」　亀塚がおでんの大根をほおばりながら言う。ぼくもはんぺんをもらって食べる。うん、味がしみこんでいておいしい。

「で、木野は？」

「あのねえ……」　野澤が今までの話をする。

「で、代役は佐沼くんがいいんじゃないかって話になったのよ」

すると、教室中にいたみんながうなずいて、

「うん、それがいい」　と言った。ああ、ぼく泣きそう。

「じゃあ、これを着てね」　衣装係の浅野がワンピースと赤いランドセルを持ってくる。

「いやだって言ったらダメ？」　ぼくは、ピンクの大きなハート柄のスカートを持って言う。

「ダメ！！」

「わあ、似合うじゃんか。リボンとかつけたらもっといいんじゃないか？」

「そうね。誰か、リボン持ってる？」

「はあい、わたし持ってまあす」

「スカートがピンクだから赤かな。オレンジもいいかもしれないね」

「いっそのこと、同じピンクがいいんじゃない？」

「痛いっ。髪をひっぱらないでよ」　ぼくは、うったえた。
「香奈ちゃんは、だまっててて！」　香奈ちゃんとは、ぼくが代役する小学生の役だ。ああ、なんてざまだ。リカちゃんって名前にすればよかったかな。
　鏡を見てぼくは、すぐ目をそらした。なんてかっこうなんだ。これじゃあ、表を出て歩けないよ……。ってこのかっこうで劇に出るんだった。あああ……。
「ひとりでぶつぶつ言ってないで、さあ、みんなが集まる前に、練習するわよ！」　野澤がどこからか、メガホンを持ってきて、ぼくにビシッと言った。
「なんでこんなことになっちゃったんだ……」　ぼくは大きくため息をついた。
「はい、ごちゃごちゃ言わない！　おじいさんと　『お化け喫茶裏飯屋』　に入るシーンから！」
「あのう、台本は？」　ぼくがおそるおそる野澤に聞く。
「自分で書いたんだから、分かるでしょう？」
「なんとなくは分かるけど、全部は分かんないよう……」
「じゃ、なんとなくでよし！」
「ええっ、いいの？」　ぼくは、目を丸くしながら言う。
「オッケイ！」　野澤が親指をグッとつき立てた。もっていたメガホンが落ちる。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　１１

終わった……。恥ずかしくて、詳しくは書かないけど、無事に終わったことは書いておこう……。

「よくやるよなあ、おれなら、自分しか代役いなくても、逃げるぞ」　田中先輩が笑いながら言う。　「結人が脚本書いたから、どんなもんか見てみようと来たのに、まさか女装して出てくるとは」

「わたしに言われるまで、気づかなかったくせに」　高梨先輩が、くすくすと笑いながら言う。

「それにしても似合っていたわねえ……。ピンクのリボン」　竹内先輩が言う。

「もう、いいですよ。その話は」　ぼくは、肩を落としながら言う。　「そういえば、木野は？　もう家に帰ったの？」

「ううん、まだ家に連絡がつかないみたい。両親は携帯電話を持っていないらしいし。わたし、保健室に言ってくる」　高梨先輩が、保健室に向かって歩き出す。

「あ、ぼくも」

保健室につくと、野澤が木野の寝ているベッドの横に座っていた。

「劇は大成功よ。佐沼くんが良くやってくれたわ」

「そう、それは良かった」　木野がほほえむ。この顔を見れたから、代役を引き受けてよかったなんて絶対に思わないぞ。

「葉子ちゃん、具合はどう？」　竹内先輩が聞く。

「だいぶ良くなりました。熱も少し下がったし」

「それは良かった。明日は、結人の演技を見るといいぜ。まるでロボットだ」　田中先輩はまだ笑っている。

「さあさ、保健室にこんなにいてはダメよ。木野さんが疲れてしまうでしょう？　帰った帰った」　保健の先生が、ぼくたちを保健室の外へ追い出そうとする。

「じゃあね、葉子ちゃん」　高梨先輩が木野に手をふる。野澤は

ここに残るみたいだ。窓をジッと見ている。
「ねえねえ、誰か来て！　大変！　人が……人が落ちてきたの！」
野澤の叫び声が聞こえた。

最初は人だとは思わなかった。だた、黒い布が落ちているのだと思った。
でも、良く見ると、それは紛れもなく人間で、顔は隠れているけど、足が見えた。どこかで見たような気がする……。
「はやく、救急車を呼ばなくちゃ……！」　保健の先生が、走って保健室から出て行く。パタパタと走る音が通り過ぎる。
ぼくらは、窓越しに見ているけど、その落ちてきた人の周りに人が集まってきた。他校の制服も見られる。でも、こんなにたくさんの人に見られているのに身動き一つしない。なにか、緊急手当てとかしなくていいんだろうか……。
そのとき、ガラリと窓を開けて、竹内先輩が飛び出した。外の人ごみから竹内先輩の妹、響も出てくる。
「お姉ちゃん！　どうしたの？」　響の声がする。姉に良く似ている声だ。
「大丈夫ですか！　……あれ？」　竹内先輩が、布をはぎとった。何もない。布の下は、地面だ。足も良く見るとテカテカしている。プラスチック？
ピーポーピーポーという救急車のサイレンが、遠くから聞こえてきた。
「まったく、誰だよ！　こんなことをしたのは……」　竹内先輩が、上を見て大きな声で叫んだ。ぼくたちも、窓から身を乗り出して上を見る。だけど、よくは見えない。
周りにいた人たちが、悲鳴をあげた。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　１２

「なんだ、どうした？」　田中先輩の声を聞かないうちに、今度は本物の人間が落ちてきた。さっきと同じ、黒い布をはおって。
竹内先輩が、一番おどろいたんだと思う。しりもちをついていた。
「うう……」　うめき声が聞こえる。生きているみたいだ。
救急車が到着した。タンカに乗せられて運ばれていく。
その光景を、ぼくたちはぼう然と見ていた。あっという間の出来事だった。
「びっくりした……」
竹内先輩がよいしょっと窓を乗り越えて保健室に戻ってきた。と、思ったら、保健室から出て行こうとする。
「どこ行くんですか？」　ぼくは聞く。
「屋上！　あの人、屋上から落ちてきたのよ」
「なんだって！」　田中先輩もついて行こうとする。ぼくもついて行ってみることにした。
階段をかけあがる。校舎が四階建てなので、けっこうのぼらなくてはいけない。最初は、走っていたのに、だんだんと歩くようになった。それでも、竹内先輩と田中先輩は息も切らさずにのぼって行く。
ぼくがもうすぐ屋上につくというときに、もう竹内先輩と田中先輩がおりてきていた。
「なんだ、お前も来ていたのか」　田中先輩がひどいことを言う。これでも、ぼくは頑張っているんだ。
「鍵がかかっていて、入れなかった」　竹内先輩が階段をおりながら言う。
ぼくはあとちょっとだったので、階段をのぼりきり、屋上へ出る戸のノブを回してみた。
たしかに開かない。
「なあ、開かなかっただろう？」　階段の下のほうから田中先輩

の声がする。ぼくは、返事をすると階段をおりはじめた。
保健室につくと、高梨先輩と木野がいた。保健の先生は救急車に乗っていった。
「自殺未遂かな」田中先輩がつぶやく。
「さあ、事故かもしれないわよ。ここで何を言っても、何も分からないわ」　竹内先輩が長い髪をかきあげる。
「……あの、わたし、もう帰ります」　木野がベッドからおりようとしている。体が小さくふるえているようにも見える。
「大丈夫？　わたしが送っていこうか？」　高梨先輩が、木野がベッドからおりるのを手伝う。
「いえ、莉子が一緒に帰ってくれると言うので……」
野澤が、木野のスクールカバンを持って現れた。
「さあ、行こう。それじゃあ、また明日。佐沼くん、休むなよう」
「うん」　ぼくはうなずく。
二人は、保健室から出て行った。
「さあ、ここにいてもしかたない。おれたちも帰るか」　時計を見ると、もう四時をさしていた。
「ちょっと、太一、明日の準備は？　今日何もやってないでしょう」　高梨先輩が言う。
「そうだった。そうだった。じゃあな、部長、結人」　そう言うと、二人は保健室から出て行った。
「あー！　思い出した」　ぼくは思わず叫んでいた。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　１３

「え？　何、どうしたの」　竹内先輩がおどろいてぼくを見る。
「ずっと考えていたんですよ。上から落ちてきた人、どっかで見たことがあるなあと思って！」
「で、誰なの？」
「マジシャンですよ」
「へ？」
「ぼくのクラスじゃないんですけど、クラスの出し物で、マジックをしているところがあるんです！　うん、そうだ。黒マントのマジシャンです」
「何年何組でやってるの？」
「えっと……、となりのとなりのとなりのクラスだからえっと……」　ぼくは指を折りながら考える。ぼくは五組だから……。
「一年二組ね。行って見ましょう。まだ終わっていないはず」
「はい」　ぼくたちは保健室を飛び出した。
一年生の教室は、四階にある。ちなみに二年生は三階。三年生は二階。部室は別校舎の二階だ。一階は、職員室や保健室、図書室などがある。
「また、階段をのぼるのか……」
「ほら、頑張れえ」
階段をのぼりきると、最初のクラスは一年七組だ。写真部が教室を借りて、展示をしている。当の七組は、校庭でたこ焼きを売っているらしい。掲示板にポスターがはってあった。
二組についた。戸は開きっぱなしで、黒いカーテンがある。窓には『おばけやしきへよこそ』　と真っ赤な字で書いてある。
「あれ？　お化け屋敷だ」　ぼくが首をかしげると、
「そこ、三組よ」　と、竹内先輩があきれた声を出した。
二組は、机をが一つもなくて、教壇と教卓だけがある。カラフル

な風船がいたるところに散らばっていて、とても華やかだ。
「保健室の真上ね」竹内先輩がつぶやく。
「え？」
「さあ、よってらっしゃい、みてらっしゃい！　大マジックショーのはじまりだようー」　ちょっとずれている感じがするピエロの服装の呼び子が、こっちに近寄ってくる。
「ねえ、ここに黒マントのマジシャンがいるでしょう？」　竹内先輩が聞く。
「いや、ここには制服を着たマジシャンしかいないよ。見てく？　見てかない？」
「でも、前にいたじゃないか、黒マントの」
「ああ、二年でもマジックショーをしているみたいだから、先輩がスパイに来たのかもね。ねえ、見てく？　今日は最後のショーだよ」
「明日見るわ。それじゃあ」　竹内先輩は片手をあげると、廊下を歩きだした。ぼくも後を追う。
「二年二組ね」　竹内先輩はつぶやく。
「え？　どうしてですか？」
「なんとなく。そういえば、田中くんたちのクラスじゃない」
二年生の教室がある三階についた。つくりは一年生と同じで階段の近くが二年七組だ。
「あ、部長」　二年二組につくと、田中先輩と高梨先輩、あと知らない先輩が何人かいた。後輩のぼくにとっては、なんだか居づらい場所だ。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　１４

「保健室の前に落ちたのは、うちのクラスだった。――遠藤弘樹。布をかぶっていたから、教室に戻ってくるまで気づかなかった」
田中先輩がボソボソとつぶやく。
「黒マントでしょう？　何で気づかなかったんですか？」　ぼくは聞く。
「んーとな、マジックは、リバーシブルの赤と黒のマントをバサッと、裏表逆にしたときに、マントを着ていた人物が変わってしまうというマジックなんだ。で、赤マントのときは弘樹で、黒マントになったら浩太になるんだ。浩太はほら……、こんなに太っているから、細くてのっぽの弘樹とはちがう。だから、あのときは、黒マントだとは思わなかったんだ。ただの黒い布だと……。それに、びっくりして、何がなんだか……」　田中先輩が唇をかんでうつむく。
となりに高梨先輩がよりそう。
「そうなんですか……」
「で？　遠藤くんが落ちたとき、近くに人はいなかったの？」
竹内先輩が聞く。
「たくさんいました。クラスの何人かと、マジックを見に来た観客たちも何人かいたし。そう……、二十人くらいはいたんじゃないかな」　近くにいた先輩が答える。
「そのときの状況は？」　現場検証をする刑事みたいだ。
「えっと……、弘樹くんが、マジックを終わらせて、ベランダに出ました。マジックが終わるといつもそうなんです。また何かあるんじゃないかと観客に思わせておいて、……結局何にもないんですけど。でも、そのときは何かちがって、何か叫んで、手すりを飛び越えていってしまったの。止める間もなかったわ」
「そのまえに、マネキンの足だけ落とさなかった？」
「ええ、手に持っていました。それもいつもとちがっていたから、

おかしいなとは、思っていたんですけど。また、新種のマジックでも披露するのかなって」
「また？」
「いつも弘樹くんは、マジックのネタを考えているんです。今回の文化祭でマジックをしようと言い出したのも弘樹くんです」
「何かを叫んでといったわね。何を叫んでいた？」　竹内先輩と二組の先輩のやり取りを、みんなはだまって聞いていた。
「えっと……、窓ごしだし、外に向かって叫んでいたから良く聞こえなかったけど……。　『……キー、……ベン……』　ぐらいしか、聞き取れませんでした。この後にも何か言っていたような気がするんですけど……、だんだん声が小さくなって、聞こえませんでした」
「そう……」　何かの呪文だろうか。
「分かったわ。ありがとう」
廊下で、パタパタと走る音が聞こえる。
「ああ、ここにいた。遠藤くん、足の骨を折ったけど、命に別状はないって。よかったわね」　保健の先生だ。ニコッと笑っている。
「そうですか。それは良かった。お見舞いに行きましょう。うん、そうそう」　ニコニコと笑っている竹内先輩。さっきとは顔が変わっている。

秋は、落ち葉と共に踊る暇もなく　１５

「響ちゃんを追いかけている人って、遠藤くんだったんだ」　部室で高梨先輩が椅子をかたむけながら言う。倒れないのかなあ。

「でも、響を好きだったとかではないみたい」　竹内先輩が文庫本をながめながら言う。

「どういうことだ？」　田中先輩が聞く。

「マジックで使うマネキンを壊されたから、弁償してもらおうとしたらしいよ」

「へええっ！」　目を丸くする田中先輩。

「夏休みに、ですか？」　ぼくも目を丸くする。

「そう、響はバスケ部でね、屋外のバスケットゴールにボールを入れようとしたら、外れちゃって、その近くを歩いていた遠藤くんにぶつかっちゃったんだってさ。で、そのとき持っていたマネキンの足が破壊されたんだって」

「マネキンが壊れたくらいなんだから、すごい勢いで飛んでいったんだろうな。バスッケトボール」

「で、落ちる前は、なんて叫んでいたんだろう」

「きっと、『ひびきー、べんしょうしてもらうぞ』　でしょうね。校庭に響の姿が見えたから、文化祭でやるはずだったマジックができなかった恨みが爆発したのね。で、いきおいあまって、落っこちちゃったのよ」

「食べ物の恨み以上に怖いな。マネキンの足を壊されて、今度は自分の足を折っちゃったのか。かわいそうな弘樹」　田中先輩はまったく、かわいそうとおもっていないだろう。なぜって、マンガを読みながら言っているからだ。

三日後に、ぼくら文芸部員は遠藤先輩が入院する病院にお見舞いに行った。

竹内先輩を一目見ると、「ああ！　響のやろう。おれを笑いにきやがった」　とベッドからおきあがってわめいている。
「おまえ、足だけじゃなくて、頭も打っちまったんじゃないか？」
田中先輩が心配そうに遠藤先輩の頭をなでる。
「さわるなあっ、おれはこいつに、こいつに……。あれ、ちがうな。誰？」　田中先輩を見る遠藤先輩。
「響の姉、光です。妹が失礼をしましたね」　苦笑しながら、田中先輩にかわって答える竹内先輩。
「まったく、先輩に向かって、誰？　はないでしょうが」　遠藤先輩の頭をごつく高梨先輩。
「え？　……そうなの。あ、どうも、遠藤でえす。はじめまして……」　ペコリと頭を下げる遠藤先輩。
「はじめてじゃないわ。ね、佐沼くん」　ニコッとぼくに笑う、竹内先輩。
「え？」　ぼくは、何のことだかさっぱりだ。
「ほら、体育館の装飾のとき」　竹内先輩がヒントをくれる。ぼくは、数秒間、頭を働かせたのち、やっと思い出した。
「あ、あのときの……」　そう、ぼくと目が会ったあのジャージ男が、遠藤先輩だったんだ。
「ああ、体育館の！」　遠藤先輩は目を丸くする。
「え？　なになに？」　高梨先輩が興味深げに聞いてくる。
「はああ、なんかもう、どうでも良くなった。マネキンは壊されるし……。まあ、おれの不注意かな。でもなあ、せっかく、文化祭でやろうと思っていたのに……」　ベッドに横になる遠藤先輩。
「今ごろ、どうでも良くなるの遅くないか？　夏休みからの話だろ」　田中先輩がまた、遠藤先輩の頭をなでる。
「だから、さわるなあって言ってるだろ。頭も少し打っちまったんだから」　手をはらう遠藤先輩。
「やっぱり……」
「夏休み？　何のことだ？　響にバスケットボールを当てられた

のは、夏休みが終わって……、えっと二週間ぐらいだ。文化祭でやりたかったなあ……」　しくしくと泣きまねをする遠藤先輩。なんだか、田中先輩に少し似ている。でも、今はそれどころじゃない。
「ええっ」　ぼくらはさけんだ。
「こらあ、病室では、静かにしろよ」　遠藤先輩が口に人さし指をあてる。
「おまえ、響のストーカーしていたんじゃないのか？」　小さな声で田中先輩が聞く。
「は？　なんのことだよ。響のやつのことなんて、好きでもなんでもねえ」　ヘンとそっぽを向く遠藤先輩。
「どういうこと？」　高梨先輩が竹内先輩を見ながら聞く。首をすくめる竹内先輩。
「さあね、でも、まあ、一件落着ってことで」
「どこがっ」　ぼくらはさけんだ。
「シー、シー！」
「こんにちわあ、遠藤先輩、だいじょうぶですかあ？」　響が病室にやってきた。その名の通り、病室中にひびきわたる。
「静かに！」　ぼくたちはまたさけんだ。
「だからあ、さけぶなって」
遠藤先輩が寝ているベッドの横にあるテーブルに、花束を置く響。
「ねえ、響、これゆりの花じゃない？」　竹内先輩が言う。そういえば、ゆりの花って花の部分がストンと落ちるから、首が落ちるって言って縁起が悪いんじゃあ……。
「そうだよ。きれいだから。買ってきたの」　ニコッとほほえむ響。
「かああっ。なんできたんだ、おれを笑いに来たのかあ」　さけぶ遠藤先輩。
「まさか。お見舞いに来たんですよお。あ、病院でさけんでいけないんだあ」　へへンと笑う響。遠藤先輩がまた泣きまねをする。その頭をなでる田中先輩。

「あのさあ、響ちゃん、夏休みにさ、誰かに追われているって言ってなかった？」　高梨先輩が聞く。
「うん、幽霊だった。夏だったからね」　平然として答える響。
「はああ？」　目を丸くするぼくたち。今度は、となりで寝ていた人に注意された。
「あ、すみません……」

秋は、たこ焼きスケッチブック　０１

「部長ってさ、えばっているわりには、あんまり上手くないよね、絵」

わたくし、佐藤沙貴絵。生徒会会長、美術部部長、文化祭実行委員会委員長をしております。成績優秀。スポーツ万能。自分で言うのもなんですけれど、何も欠点なんて、ないと思っていますの。

なーんて、それは、外のわたし。一行目の内緒話がグサリとつき刺さる今日このごろ。勉強しなさいと言う母の言葉より、グサッとくる。でも、ちゃんとしていなくては。会長、部長、委員長なのだから。

友だちといったら、一人しかいない。幼なじみの竹内光だ。あの子は、いつもしっかりしていて、勉強をしていなさそうなのに、わたしよりも点数がいつも上。選挙に勝ったのだって、まぐれだと思う。うん、きっとそう。わたし、人前に出るとカッとなる性格で、いつも選挙演説しているみたいだって言われるけど、ちがうんだ。

でも、光は分かってくれていると思う。わたしの本当の姿を。

「佐藤さん、佐藤さん、もうすぐ委員会がはじまりますよ」　同じクラスの久保くんが、椅子にすわっていたわたしの肩をたたく。

「うん……。ありがとう」　久保くんが目を丸くした。わたしがお礼を言ったことがそんなに意外なの？

委員会中、わたしは光の様子をじっと見ていた。

スラスラと委員に指示をだす光。

ああ、なんでわたしは、生徒会に立候補してしまったんだろう……。目線を下に落とす。手が見えた。手をじっと見る。油絵で汚れた手。洗っても洗っても落ちない。絵の具がしみこんでいるんだ。

意識があまりないまま、部室へ行く。いつの間にか、委員会は終わってしまった。

これから忙しくなるのよ……。頑張らなくっちゃ……。
でも、今のわたしには、雑用しか残っていない気がする……。いいのかな。こんなので。
わたしだけでなく、委員会みんながそう。裏方にてっするだけでいいのかしら……。
わたしは、歩きながら考える。
なにか……そう、文化祭実行委員をやって良かったって思えるような……。
そうだ。委員会で、なんか出し物をしたらどうだろう。
もっと忙しくなるかもしれないけど、きっと、楽しいはず。
「それが、いいわ」　わたしは、思わず口にだしていた。となりを歩いていた山崎さんが首をかしげる。
「どうしたんですかあ？　部長」
「いいえ、なんでもないの。ちょっと、いいことを思いついただけ」　わたしはニッコリとほほえんだ。
「えー、なんですかあ」　山崎さんが、一緒に歩いていた人と顔を見合わせる。えっと、この人、誰だっけ……。
「やだなあ、部長、木野ちゃんですよ」　木野と紹介された人が、おじぎをした。
「あら、そう……。同じ部？」　美術部は人数が多すぎるから、毎日あわないと顔と名前が覚えられない。活動場所も二つに別れているし。
「はい。一年、木野葉子です。よろしくお願いします」　……そうだ。思い出した。今年の春の作品展で金賞を受賞した子じゃないの。ああ、なんで忘れていたのかな。
「ええ、よろしく」　忘れていたなんて、言ったらダメ。『部長、部員の名前を忘れたんですかあ』　とか、また変なうわさが流れてしまう。冷静に。今聞いたようにふるまわなくては。
「部長。この子すごいんですよお。春の作品展で金賞を取ったんですから」　ね、と木野さんの顔を見る山崎さん。ここからじゃ、

山崎さんの顔は見えないけど、後輩を自慢するとてもいい顔をしていると思う。わたしも自然とほほえんでいた。

「そう。知らなかったわ。とってもいい絵なんでしょうね」　わたしは、髪をかきあげながら言う。

秋は、たこ焼きスケッチブック　０２

「お母さま。今日は、委員会の資料を作らなくてはいけませんの。家庭教師の方はまた、明日ということに、していただけませんか？」

母が相手だと、会話の上品さレベル五だ。少し困ったような顔をしていうと、母は何でも言うことを聞いてくれることを知っている。

「だめです。また、学年二位だったのでしょう。受験生なのですから、身を引き締めていかなくてはいけませんの。委員会の資料は、委員の人にしてもらえればいいのではないですか？　委員長なのですから、それくらいは可能でしょう。沙貴絵さん。あなたは、お優しいから、何でも引き受けてしまうのですね。でも、受験生だということを、お忘れのないように」　そう言うと、母は出て行った。

信じられない。

わたしは、ボゥっと母の出て行ったドアを見つめた。

クルリと椅子を回転させる。

わたしの手は自然とコンピュータのスイッチを切り、参考書を手に取っていた。

こんなことってある？

数学の問題をときながら考える。

ええっと、この問題は、連立方程式を使った問題ね……。母が言うことを聞いてくれないなんて……。エックスイコール三とすると……。受験生だからかな……。よおし、式は立てられた。あとは解くだけね。……ああ、委員会が文化祭で行う出し物の企画を考えようと思ったのに……。

「……できた」　問題を五問解き終わったとき、わたしは分かった気がする。　「結局、何でも言うことを聞くのは、母じゃなくわたしなのね……」

ふうう。

わたしは、首をふると、参考書に取り組んだ。

もう、何もかも良くなった。と言っていい。
会長、部長、委員長になったのも、母に喜ばせるためなのかも。
でも……。
実際に喜んでくれた？
ううん。それがさも当たり前だというように、うなずいただけだ。
あああ、何をやっているんだろうか。わたしは。
どんなに頑張っても、光には追いつくことができない。
それでいいや。
やっきになって頑張っていた自分がバカらしい。
もういいんだ。
そんなこと聞いたら、母は倒れちゃうかもしれないけど。
ううん。母なんて関係ない。関係あるのは自分だけだ。

体育館へ向かう。
光に呼ばれて来た。
文化祭三日前。わたしは、ただたんたんと文化祭の準備を進めていた。
委員会で、なにか出し物を。と思っていたけど、やっぱりやめた。
楽しいだろうけど……。
部活にもあんまりでていない。わたしがいなくても、部員はまだまだいるのだから。
委員会の仕事の方が忙しい。クラスの出し物もある。わたしのクラスは、体育館でダンスをやるらしい。わたしは、照明係をやることにした。
何度か、体育館に下見に来たけれど、全然飾りつけされていなかった。まったく、何をしているんだか、一年生は。
「沙貴絵、こっちこっち」　体育館の入り口の前の大きな木の下でまっていた光が手をふって、こっちおいでをする。
「何？　わたくし、他のクラスの見回りに行かなくてはいけないの」

「ねえ、最近、部活には行った？」　わたしの言っていることを無視して光が言う。

秋は、たこ焼きスケッチブック　03

「一週間前かしら……。それが？」
「そう……」　と言うと、光は歩き出した。わたしは、光のあとを追う。
光がとつぜんふりむいた。びっくりしてわたしは一歩下がったけど、わたしじゃなくて、もっと後ろのほうを見ていた。わたしもうしろのほうを見る。
うしろの木の上。さっき光がわたしを待っていた木の上に、ジャージ姿の男子が双眼鏡を持って体育館のほうをじっと見ている。
「誰……なにやってんだろ」　光がつぶやく。わたしは首を横にひねった。
「わたくしの話を、ちゃんと聞いていました？　わたくし見回りが……」　光の横に並ぶともう一度言った。光はだまって歩き続ける。
何？　何なんだろう。わたしはだんだん腹が立ってきた。
呼び出しておいて何にも言わないなんて、なんてこと。
そのまま帰っちゃおうかな。忙しいんだから……、まったく。
わたしは、光のうしろ姿を見ながら考える。光は、靴をぬいでスリッパにはきかえているところだった。体育館は土足厳禁だからね。
「ほら」　光がわたしの分もスリッパを出してくれる。わたしはだまってそれをはいた。
「沙貴絵、みてごらん」　下を向いてスリッパをはいていたわたしの肩をたたく光。
わたしは、顔を上げる。
そこには……。
「何……、何もしていないの？　あと三日しかないのよ」　わたしは、何も飾りつけがされていない体育館から、光へと目線を移した。

「今、一所懸命やっているの。たった三人でね」　光は、わたしをじっと見すえて言った。
体育館を良く見ると、一人が鳥の絵らしきものをはっている。あれは確か光の弟……。
何？　どういうこと？　一年生の委員は十四人いるはずじゃあ……。
思ったことがそのまま口から出る。
「ねえ、沙貴絵。美術部の一年って何人いる？」
「……十八人。あ、一人減ったから十七人かな……」　もう、会話の上品さレベル一だ。意識してしゃべっている言葉なんか要らない。
「その中に、文化祭実行委員会は何人いる？」
「え……」　わたしは考える。一人、二人……。　「十一人だ」
「全員が放課後、部活に行っているのよ。頑張って、やっているの。手伝ってくれる？」
「……」　わたしは、下を見た。光がだしてくれたスリッパがある。　「ええ……もちろん」
歩き出そうとするわたしを、光が止める。
「何？」　わたしはふり向く。そのときの、光の顔……。
「行こう」　光がニコッとほほえむ。
「ええ」　わたしは、ツンとすますと、体育館の中央に歩いていった。

文化祭当日。
この三日間、わたしは頑張った。
はじまったばかりなのに、達成感すらある。
でも、気をゆるめてはいけない。まず、教室の見回り、外にも行って、クラスのところにも顔を出さなくっちゃ……。
わたしは、正面玄関にある大きな鏡で制服のリボンを閉めなおし、気合いを入れる。

よおし、頑張りましょう！

「何か問題は？」　わたしは、ボードに紙をはさみ、シャープペンをかまえながら言う。

「いいえ、何もありません。それより会長、たこ焼き買いませんか？」

「何か困ったこと、問題がありましたら、実行委員におっしゃってください」　わたしは、百円を渡し、たこ焼きを買った。片手で持たなくてはいけないので、熱い。

わたしは、今日と明日だけあるベンチに腰を落とすと、ボートを置きたこ焼きをほおばった。

うん、おいしい。今度レシピ聞いて作ってみようかな。

秋は、たこ焼きスケッチブック　０４

二個目のたこ焼きを口に入れながら、周りを見る。
青空に、屋台がたくさんある。
食欲をそそられる匂いにつられる人々。
笑っている人。おでんを食べている。
怒っている人。きっと、たい焼きのあんが少なかったんだろう。
泣いている人。買ったばかりのソフトクリームを落としてしまった幼稚園児。
最初は、委員長になったとき、今年の文化祭はわたしが作っていくんだ。と、思ってたのに、何かちがうな。
わたしは五個目のたこ焼きを口に入れる。
みんなが作ったんだ。なんて言うと、月並みだけど。
その通りかな。
最後のたこ焼きを口に入れる。ゴミはゴミ箱へ。
ゴミ箱の近くに行くと、周りにゴミが散乱していた。わたしは、それを一つひとつ拾い、ゴミ箱に捨てる。まったく、ちゃんと捨ててくれないと……。
「ねえ、これ食べる？」　とわたしにたこ焼きをつきつけてくるのは、光だった。
「さっき食べたけど」　空き缶を拾いながら、わたしは言う。
「八個って、ちょっと多いよなあ。一人じゃ食べられへんわ」
もぐもぐと口を動かしながら光が言う。わたし、全部食べられたんですけど。しかも、みょうな関西弁になってるし。わたしは、光がつまようじを渡してくるのでそれを受け取ると、一個食べた。やっぱりおいしい。
「なあ、これ終わったら今度はポップコーン食べへん？　うちがおごってやるわ」　光は最後の一つをポンと口にほうりこむと、ゴミを拾い出した。

「あ、体育館行かなくては。午後の部がはじまってしまうわ」
わたしは時計を見て光に言った。
「もうそんな時間？　わたしも行こう。あのね、後輩が書いた脚本が劇になっているんだよ」
わたしと光は急いで残りのゴミを全部拾い集めた。
体育館へ急ぐ。途中、大きな木の前で立ち止まり、誰もいない上を見上げて、二人して首をかしげた。「何だったんだろうね、あの人は」
体育館につく。今日は体育館の床にビニールシートがはってあるので、土足でもいいんだ。
「沙貴絵ちゃん、沙貴絵ちゃん」　わたしは呼ばれたほうに走っていく。クラスのみんなが待っていた。光は、開いているパイプ椅子を探しにうろうろしている。
「わたしたちの出番は、この次の劇が終わったらすぐだから。沙貴絵ちゃんは、照明係だっけ？　うん、それじゃあ、もう二階にあがって準備しててくれる？」
わたしはうなずくと、二階へとあがった。あがっている途中に、ビーという音がして、あたりが暗くなった。わたしたちのクラスの前にやる劇がはじまったんだ。
わたしは、ポケットから体育館の出し物のプログラムを取り出した。
ええっと、『劇　不思議な客人たち　一年五組　主演・亀塚健嗣　野澤莉子……その他たくさん！　どうぞ笑ってやってください！！　ちなみに脚本は佐沼結人』　最後の四文字がとても小さく書かれている。暗いせいもあるけど、とても読みにくい。
ふうん。これか光が言っていた後輩が脚本を書いているっていう……。
わたしは、照明のライトが取り付けられている場所に行く。
一年五組の生徒がライトを動かしていた。
「あ、会長！　どうしたんですか？」　びっくりしてふり向く一

年生。

秋は、たこ焼きスケッチブック　05

「次はわたくしたちのクラスですの。待っていていけない？」
「いいえ。ぜんぜん問題ありません。あ、どうぞ」　座っていたパイプ椅子がわたしにさしだされる。
「いいのよ。劇を見るから」　わたしは、二階のさくによりかかると、劇を見はじめた。

背の低い、ランドセルを背負った女の子が出てくる。うしろからよたよたとおじいさんも出てきた。
「ねえ！　このお店に入ってみない？　おじいちゃん！」　女の子はぴょんとはねると、おじいさんの手をひっぱる。倒れるおじいさん。
「ああ！　おじいちゃん！　誰かあー、だあーれーかあー、おじいちゃんが！」　おじいさんの肩をゆらし、さけぶ女の子。
「どうしたんだっ」　お店　（ダンボールでできている）　から、人が飛び出してくる。その人はなぜか、野球のユニホームを着ていて、手にはバットを持っている。お店の人……ではなさそうだ。
「おじいちゃんがおじいちゃんが……」　泣き出す女の子。
呼吸、脈があるか調べる動作をする野球のユニホームを着ている人。　「息をしていない……、脈もない……」　そうつぶやいた。女の子の泣き声がさらに大きくなる。
「お……おじい……ちゃん……、うわーん」
「どうしたんですかあ」　またお店の中から人が出てくる。女子高生かな。手には携帯電話を持っている。
「きみ！　早く救急車を！」　野球のユニホームを着ている人がえらそうにさけんだ。
「ええー、なんでわたしが……」　そういいながら、携帯電話を操作する女子高生。　「うわ、圏外なんですけどお……。ってか、

どうしたんですかあ」
「この人……、呼吸をしていないんだ……」　ガクッとうなだれる野球のユニホームを着ている人。もうあきらめたんだろう。
「うわっ、マジでえ」　そういうと、女子高生は制服の上着をぬぐと、そでをまくり、　「大丈夫ですか！　聞こえますか！」　とさけんだ後、処置をしはじめた。
生き返るおじいさん。
「よかったよかった」　女の子、おじいさん、野球のユニホームを着ている人、女子高生の四人がうんうんとうなずいて、舞台が暗くなる。

……何これ？
わたしは、さくからはなれると、パイプ椅子に座った。
何、今のは……。
「どうでした？　会長？　おもしろかったでしょう。五幕までありますからね。楽しんでください」　ライトを消してふり向く一年生。わたしは苦笑いをした。
こんなのかあと四幕もつづくの？　冗談じゃない。
わたしはさりげなく立ち上げると、その場を立ち去った。

秋は、たこ焼きスケッチブック　０６

今のは五分くらいだったから、二十分ぐらいは余裕があるわね。
体育館から外に出る。途中、体育館から笑い声が聞こえた。まさか、あの劇で笑ったんではないでしょうね。
さて、どこで時間をつぶそうかな。
わたしは、とりあえず校舎に入ってみることにした。校舎前にある掲示板には、いろいろなポスターがはってあった。掲示板じゃ足りないのだろう、廊下のいたるところにはってある。
わたしはそのポスターをながめながら、校舎に入る。
そしてそれは。
靴を入れるロッカーにはってあった。
『美術部感動の超大作！　共同制作「学校の風景」』という文字とその絵……。
この絵は……。
わたしは、走り出した。
別校舎二階美術部部室へ。

美術室前はいつになく混雑していた。毎年ことで、とても人気がある。
わたしは、人ごみをかき分けて部室に入る。
絵に前に立つ。
これは……。
やっぱり……。
わたしはごくりとつばを飲みこんだ。
手を強くにぎりしめる。
……木野葉子の絵。
全部。すべて。
こんなに大きなキャンバスに一人で……。

まちがいじゃない。
あんなに見た、昼の太陽の絵と同じ画風。
まちがえる、はずがない。
わたしはふりかえると、副部長の姿を探した。
いた。一番奥のテーブルに腰かけながら部員と話をしている。
「大林くん」　わたしはそのテーブルに近づいた。
「あ、部長。今年も大成功ですね」　ほほえむ大林くん。いつものわたしなら、一緒にほほえんでいた。
わたしは、顔一つ動かさずに言った。
「何で、すべてを木野さんにさせたのかしら？」
「部長……、何言ってんですか。みんなで協力して完成させましたよ。なあ」　まわりの部員に同意を求める大林くん。うなずく部員たち。
「ウソをつくのは止めなさい！」　わたしはテーブルをバンッとたたいた。まだ笑っている大林くんがにくたらしい。部室中が静かになる。
テーブルをたたいた手が、じんじんと痛い。
大林くんは、急に真面目な顔になると腕をくんだ。
「そうです。すべて、木野にやらせましたよ。上手いんだもん。木野ちゃんは」
「……」
「木野の名前を知らなかったそうですね？　金賞を取ったのに。だから、部長に名前を覚えてもらおうと、木野もいやがらなかった」
「……わたしのせいだって、おっしゃるのね」
「ああ、そうですよ。部長は一度も部室に来なかった。だから、おれたちがサボっているのにも気づかなかったんでしょ」
「……」
「知ってます？　今朝、倒れたんですよ。木野」
「え？」
「うわあ、それも知らないんだあ。かわいそう、木野ちゃん」

大林くんは、わたしに近寄った。「もう、部長づらするのやめたら？　たいした画力もないくせに」

秋は、たこ焼きスケッチブック　07

わたしは、力任せに目の前の大林くんをなぐると、部室を飛び出した。
何？
何なのよ。
わたしが悪いの？
どうして。
……どうして。
急に気持ちが悪くなってきた。
わたしは、トイレにかけこんだ。
吐きはしなかったけど、鏡を見ると、目から涙が出ていた。
何よ。
わたしは、鏡の自分をにらみつける。
何か文句を言いたそうな顔じゃないの。
わたしは、悪くないって？
何もしていないって？
頑張ったんだって？
結果がこれよ。
ダメじゃない、こんなんじゃ。
ボゥと鏡を見る。
どれくらい見ていただろう。
自分にも焦点が合っていない。
ただ、ガラスの板を見ているだけ。
見ていても、何も考えていない。そんな時間が、長く続いた。
時計を見る。
もう、クラスの出し物のダンスがはじまっていた。
でも、大丈夫だったろう。
わたしの代わりなんて、いくらでもいる。

結局、わたし、何にもできてない。
でも、順調に文化祭は進んでいるし、特に大きな問題もおきていない。
なあんだ。
精一杯はり切って損した。
わたしは、顔を洗うと、トイレから廊下に出た。
「あー、いた！　沙貴絵ちゃん！」　うしろのほうで声が聞こえる。ふり返ると、クラスのみんながそこにいた。
「何で……」
「もう、探したんだからあ」
「今ダンスをやっているんじゃなかったのかしら？」　わたしはみんなにおそるおそる近づきながら言う。
「順番を変えてもらったんだ。六組は一人欠けても六組じゃないんだから」
「ダンスは、六組みんなの出し物だからね！」

クラスの出し物が終わると、わたしは走って保健室へ向かった。
保健室には誰もいない。
保健室の中に入ると、ならんでいるベッドの中に一つだけ、使った形跡がある。
さわると、少しあたたかい。
木野さんはきっと、帰ったばかりだ。
わたしは、保健室を飛び出すと、また走り出した。

秋は、たこ焼きスケッチブック　０８

正面玄関から出る。
あたりを見渡す。
片付けをしている屋台がちらほら見られる。まだ、食べ物を売っている店の方が多い。
いないな……。
もう、遠くに行ってしまったんだろうか……。
歩きながら探す。
いた！　西門からちょうど出て行くところだ。木野さんのほかにもう一人いる。
「木野さん！　木野葉子さん！　待ってー」　力の限りさけんだ。
木野さんがふり向いた。木野さんだけでなく、校庭にいた人たちもわたしを見た。
わたしは、少し恥ずかしくなって、木野さんに向かって走り出す。
「どうしたんですか？　部長」　木野さんともう一人の女子が目を見開いて言う。
「大丈夫？　ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」　わたしは、深く頭を下げた。
「え？　何のことですか？　えっと……とにかく頭を上げて下さい」
「木野さん……、一人に共同制作をやらせてしまって……。すべてわたしの責任です。部活にいけなかったから……」
「ありがとうございます」　とつぜん、木野さんが頭を下げた。
「え？　どうしたの？」
「わたしの絵をみて、分かったんですね。先輩たちがわざわざ、部長に教えるとは思えませんし。覚えててくれたんですね。わたしのこと」
「ええ……。知っていたわ。ずっと」

「それに、部活にこれなかったのは、当然のことだと思います」
「……え？」
「部長は委員会で忙しかったのでしょう？　来られないのは当たり前です。それに、一人で全部描いたんじゃありません。何人かは手伝ってくれたし……。ちょっと無理してしまったけど、ぜんぜん辛くはなかったです。むしろ、大きな達成感があります」　ニッコリとほほえむ木野さん。
「でも……」
「部長らしくありませんね。こんなにすばらしい文化祭を作ったのは部長じゃないですか。もっと胸張っていいと思います。わたしなら、エヘンってえばっちゃうなあ。まあ、そこがわたしと部長の大きなちがいですね」
「わたしが……作った？」
「そうですよ。ね、莉子」　莉子と呼ばれた子は、大きくうなずいた。　「うん、生徒会長がいなきゃ、文化祭はめちゃくちゃですよ。きっと」
「……ありがとう。気を使ってくれて」
「気なんか使っていませんよ。そもそもわたしたちに気なんてありません」
「ねえ、気ってなんだろ？」　莉子さんが木野さんに小声で聞く。
「さあ、わたしも良く分かんない」　首をふる木野さん。
わたしは、少し笑った。
二人が気をたくさん使ってくれたおかげで、すこし元気が出た気がする。
「ありがとう」
「それじゃあ、また明日」
「ええ」
わたしは、二人が歩いていくのをずっと見ていた。
ありがとう。
もうすぐ引退だけど。それまで頑張ってみるよ。

「沙貴絵、素が出てたよ。素が」　光だ。ポップコーンが入っている大きい紙コップを持っている。しかも、両手に二つも。「はい。沙貴絵の分」

「え？　何で？」　わたしは、山盛りのポップコーンが入った紙コップを受け取る。

「さっき、言ったやんか。ポップコーンをおごるって」

「……何をおっしゃっているのかしら。わたくし、これからいろいろと忙しいんですの」　わたしはすましてそういうと、ポップコーンを口にほうりこんだ。

冬は、雪の空、青いだるま　01

竹内先輩が文芸部を引退して、三ヶ月がたった。
今はもう十二月。そろそろ雪が降るかなという時期だ。
「寒い。さむーい」　新部長の田中先輩があいかわらずふるえている。新副部長の高梨先輩はあいかわらずコンピュータをいじっている。
ぼくはというと、やっぱりあいかわらずだ。
本を読んでみたり、小説を書いてみたり。一番多いのは田中先輩と話しているときかな。
さあて、何を書くか……。特別何も書くのないんだよねえ。平和な一日書いたら、ただの日記だよねえ……。
ああ、そうだ。この前、春に書いていた小説が完成したんだ。まだ、誰にも見せていない。約束だからね。
「寒いよ、結人。なんとかしなさい」
「何で、命令形なんですか」
「えっへん。部長だからです」　パイプ椅子を大きくゆらす田中先輩。そして、派手に転んだ。やっぱりね。思ったとおりだ。
「バカじゃないの」　高梨先輩に鼻で笑われる田中先輩。少しかわいそうだけど、いつものことだ。
「やあやあ。みんな元気かね」戸が開いて、竹内先輩が来た。
「あ、部長。どうしたんですか？」　田中先輩が頭をさすりながら言う。
「受験の息抜きだよ。ああ、疲れた」　竹内先輩はパイプ椅子に座ると、文庫本を開いた。
「先輩、先輩」　ぼくは、竹内先輩に原稿用紙を差し出した。
「え？　何？」　原稿用紙を受け取ると、ぼくの方を見る竹内先輩。
「ほら、約束したじゃないですか。春に」

「あ、書き終わったのね。忘れてるのかと思った……」　と言って、原稿用紙を読み始めた。
静かになる部室。
「なあ。おれには？　約束したっけ？」　田中先輩が聞いてくる。
「してませんけど。見たいんですか」
「見たいんです」　おどけた顔をして田中先輩が言う。
「わたしも」　高梨先輩も手を上げる。
「いいですけど……。きっとつまらないと思います」
「いや、面白いね」　竹内先輩がつぶやく。
「もう読んだの！　部長。五十枚ぐらいはあるぞ」　テーブルの上にある原稿用紙をぱらぱらとめくる田中先輩。　「あ！　かさましてる！」
「だって、六枚って、なんか少なすぎるから……」
「だったら、その分なんか書けよ」
「だって……。六枚で終わっちゃったから……」　ぼくは、笑う。田中先輩ににらまれてしまった。
「でも、いい話だね」　竹内先輩がほほえんでくれる。
「どれどれ」　田中先輩が原稿用紙を六枚取り上げる。のぞきこむ高梨先輩。
「なんだよ。順番守れよ……」　田中先輩がつぶやく。
「いいじゃん。見たいんだから」　だまりこむ田中先輩。
竹内先輩は文庫本を見はじめる。
ぼくは、何もすることがなくなったので、椅子をかたむけてみる。そっとそっと。
「何やってんだよ」　派手に転んだぼくを見る三人。
「あ、いや。なんでもないです」　きれいにたたまれてしまったパイプ椅子を元に戻す。
「んー、何だか良く分かんないなあ」　高梨先輩が感想を言ってくれる。
「……まあ、まあまあって感じだな」

「やっぱりそうですよね……。まあ、最初ですから」
「自分で自分をなぐさめんな」　田中先輩にずつきされた。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　01

おれは、田中太一。湖宮中に入学したばっかりだ。クラスは二組になった。担任の先生はやさしくて、ちょっと厳しい。小学校からの友達もたくさんいるし、なかなかいい中学校生活のスタートだ。

「なあ、部活はどこに入る？」　となりの席の関原が聞いてくる。今は、休み時間だ。次は移動教室なので準備をする。

「んー、どうしよう。べつに入りたいのがないんだよなあ」　カバンの中からアルトリコーダーを出す。机の中から教科書も。

「だったら、吹奏楽に入らない？　楽しいぜ、きっと」　目をキランと輝かせる関原。

「うーん、考えとくよ」　あいまいにうなずくと、おれは教室を出た。関原もついてくる。　「関原は、吹奏楽に入るのか？」

「ああ、もちろん。実はもう入部届けだしちゃったんだ」　ヘラッと笑う関原。入部届けを出すしめきりはまだ、二週間もあるのに。

音楽の時間中。おれは決めた。吹奏楽部はやっぱり無理だ。

授業の最初にある合唱で、音を大きくはずして、みんなに笑われること五回。

リコーダーが上手くふけなくて、先生に個別指導を受けること二回。

関原に、おまえをさそったのはまちがいだった。と言われること三回。

これでもし、吹奏楽部に入ったとクラスみんなに知れたら、いよいよ笑いものになる。

「やっぱダメだね。吹奏楽は」　音楽室から教室に帰る途中、関原に言った。

「ああ、そうだろうね」

そもそも、おれは、音楽が好きじゃない。

さて、何にするか……。
そろそろ真剣に考えなくてはいけない。入部届けのしめきりは明日になってしまった。
部活といったら、運動部がまず思い浮かぶけど、何か疲れそうだし。
盛んなのは、美術部だけど、そんなに美術好きじゃないし。
家に帰ってから、おれは部活の一覧表を取り出す。
野球、サッカー、バスケ……。の項目にななめ線をひっぱる。
あと、吹奏楽。美術部。
定規で線をひっぱっていく。残ったのは……。
マンガ部、科学部、コンピュータ部、の三つ。
おっと、一つ残ってた。
――文芸部。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　０２

何だこれは。聞いたことがない。
まあ、いいや。
この四つの部活を明日見て回ろう。それで決めるかな。
次の日の放課後。おれはまず、マンガ部を見ることにした。
「失礼します」　と言って戸を開ける。誰もいない。まだ活動を始めていないのだろうか。それとも今日は休み？
おれは、勝手に中に入ると、部室の中を見渡した。
「……マンガ本が、一つもないじゃん」
部室は机と椅子しかない。部室をまちがえたのかな。
帰ろうとしたとき、机の上の紙に目がとまる。紙の束がある。あと、ペンも。
何か書いてあるぞ……。
おれは、紙の束に顔を近づける。紙の束を持たなかったのは、最近、推理マンガに、犯人が指紋を残したからつかまったというのを読んだからだ。あと、おれ、実は目が悪いんだ。今日、メガネもコンタクトも忘れてきちゃったんだよ。
「……マンガだ」　そこには、決して上手とはいえはい、マンガが置いてあった。そういえば、ほとんどの机の上に置いてある。
何？　もしかして、マンガ部ってマンガを描く部なのか？
何だ……、だた、マンガを読むだけだと思ったのに……。
おれは、頭の中の　『部活一覧表』　の　『マンガ部』　の項目に定規で線を引く。
さて、次は、科学部かな。
と、おれが帰ろうとしたとき、マンガ部部員が入ってきた。
「あれ？　見学？」
「ええ、まあ……。それじゃあ」　おれは、入ってきた部員とすれちがうように出た。

「もう帰っちゃうの？」
「ハハ……、失礼します」　おれは、おじぎをすると、その場をあとにした。
科学部、コンピュータ部も不発に終わった。
何かイメージとちがうんだよなあ。
おれは、廊下を歩きながら考える。
科学部は、わけ分かんない実験をしているし、コンピュータ部は、電源の付け方が分かんないって言ったら、追い出されちゃったし。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　03

あとは……、文芸部か……。
何をする部だろう。文芸？　文？　作文？
うわあ、おれが一番苦手なやつじゃん。
まあ、一応行ってみるかな。もう、他にないし。
おれは、別校舎の入り口にある地図のところへ行く。ここには、別校舎の教室の場所が書いてある。別校舎の教室はほとんどが部室だ。部室じゃないところといったら、技術室、家庭科室、美術室、コンピュータ室、あとはトイレと物置ぐらいかな。
ええっと……文芸部……文芸部……。あれ？　ないなあ。もしかして、本校舎にあるのか？　でも、本校舎に部室があるなんて聞いたことないし……。
「あ、先生、先生」　おれは、渡り廊下を渡ってきた先生に聞いてみることにした。「文芸部の部室ってどこですか？」
「確か、文芸部に部室はなかったような……」
「え？　それじゃあどこで……」
「図書室じゃなかったかな……、いや、普通教室だっかも知れん……」　なんだか分かんない先生だ。
おれは、頭を下げると、渡り廊下を歩いて、本校舎に入った。
えっと……、図書室は一階だったかな。
入学したばかりの一年生にとって、新しい学校は巨大迷路と等しい。

図書室についた。けっこう広い。教室三個分、いや四個分ぐらいはあるんじゃないだろうか。それくらい本棚がたくさんあって、座るところが見当たらない。もう、ビッチリ詰まってますって感じだ。
ここじゃあ、国語の時間とかに図書室で授業できないじゃないか。
本棚の迷路を通り抜けると、やっと机と椅子を発見した。

会議室にあるような丸い長テーブルのまわりにパイプ椅子が十五脚ぐらいある。その椅子には七人くらいのパラパラと座っている。
全部、文芸部の人なんだろうか。おれは、とりあえず近くにいる人に話しかけてみることにした。
「あの……」
「なんですか？」
「文芸部の人ですか？」
「いいえ、ちがいますけど」　その人は、おれをけげんな目で見ると、立ち上がって去っていった。
なんだ。いないんじゃん。
おれは、回れ右をすると帰ろうとした。
「ねえ！　文芸部に入るの？」　一番奥の席に座っていた人が、おれを見る。その近くにいた三人も同時のおれを見る。
……この人たちが文芸部員？

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　０４

「いいえ、見学に……」　と、言うおれの声を無視して、四人が近づいてくる。
「やったあ……」
「一人目……」
「新入部員……」
「イヒヒヒヒ……」
何？　どうしたんだ。この先輩たちは！
おれはそっと後ずさりすると、すばやく回れ右をして逃げ出そうとした。が、制服をガッシリとつかまれた。
「逃げるなよう……」
「そんなあ」　おれは、なさけないことに、なさけない声を出してしまった。

「部長の森那津子です。三年七組でえす。よろしく！」　真ん丸いメガネをかけた森部長は、メガネだけじゃなくすべてが丸い感じだ。きっと、性格も丸いんだろうな。
「はあ」　おれは、コクンとうなずく。
おれは椅子に無理やり座らされて、いきなり自己紹介がはじまった。
「副部長の杉雅治です。森さんとおなじく三年七組！　よろしくなあ！」　杉先輩はなんだか杉の木みたいに、背が高い。中学に入ってから背が伸びたんだろう。制服がちょっと小さくなっている。目が細くて眠たそうだ。
「二年四組の竹内光です。えっと……、よろしくね」　竹内先輩は、肩まであるストレートの黒髪をパサリとかきあげた。なんだかかっこいい。
「……」　もう一人の先輩は、髪が短くてすこし茶色。染め

ているのだろうか。顔は良く分からない。こっちを見ていないからだ。何かを読んでいる。なんだろう。

「茉里！」　竹内先輩に言われてやっと、おれのほうを見る先輩。

「……二年三組の皐月茉里。よろしく」

「……」　なんてきれいな人なんだ。森部長は愛嬌があってかわいくて、杉先輩はやさしそうだし、竹内先輩はかっこよくて美人だ。

でも、一番きれいって言ったら、皐月先輩だろうな。

似てる。

おれの幼なじみに。

「で、あんたは？」　皐月先輩が聞いてくる。言葉はきついけど、目がしっかり笑っている。

「あ、えっと、一年二組の田中太一です。これからよろしくおねがいします」　おれはパイプ椅子から立ち上がり、頭を下げた。カーンといい音を立てて倒れる椅子。そんなのはなかったかのようにおれに拍手を送る、文芸部員の先輩たち。なんだか、恥ずかしい。

「静かにしなさいっ」

司書の先生にしかられてしまった。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　05

「あーあ、部室ほしいなあ」杉先輩がつぶやく。
「ここじゃあ、何もできないよねえ」　森部長もつぶやく。
「あ、あの……」　おれは、おそるおそる聞く。
「何？」　先輩たちがいっせいにこっちを向く。なんか、じっと見られると、話しづらいなあ。
「えっと……、文芸部って何をするんですか？」
「へ……？」
「何？　何にも知らないで文芸部に入部するの？」　皐月先輩に思い切り笑われた。他の先輩は苦笑いをしている。
実はおれは、まだ一言も文芸部に入部するとはいってない。まあ、他の部より楽しそうだから、ここに入ってもいいけど。とりあえず、何をする部かは聞いておこうと思った。
「あの、分かりますよ。なんとなくは。ほら、作文を書くんですよね」　おれは、手をぱあに広げて言う。
「ジャンケンしたいの？」　竹内先輩が手をチョキにして言う。一応、お手上げのつもりだったんだけどな。まあ、負けってことで……。

おれと文芸部員の四人は、図書室を出た。さっきから、ずっと司書の先生ににらまれていたからだ。
「学習室に行きます？」　竹内先輩がとなりの教室を指さす。そこには、『学習室１』　と書かれてある。
「そこしかないよなあ」　杉先輩はそういうと学習室に入っていった。おれもついていく。
そこには、教室みたいに机と椅子がならべてあって、二十人ぐらいの人が参考書を広げたり、本を読んだりしている。話をしている人が一番多くて、ここなら、うるさくしても大丈夫そうだった。さ

っき、おれがまちがってはなしかけてしまった人もいた。おれを見ていやそうな顔をする。なんだよ。まちがえちゃっただけじゃんか。

「ここはね、図書室があまりにも椅子の数が少ないから、もうけられている教室なの。ほら、あそこにある扉は図書室直通なのよ」

森部長が親切に教えてくれる。

「へえ、そうなんですか」　おれは、森部長が指さすほうを見る。黒板の横にたしかに扉があった。でも、立入禁止って感じで入りにくそうだ。

「ほらほら、部長と田中くん！　こっちこっち」　竹内先輩が手招きしている。杉先輩と皐月先輩が机をガタガタと動かしていた。おれも手伝う。話し合いをするときみたいに机が五つくっついた。

「で？　何の話だっけ？」　杉先輩が椅子に座りながら言う。

「えっと、田中くんがよく文芸部のことを良く分かっていないってことが分かったのよね」　竹内先輩がおれのほうをみる。おれはうなずく。

「わたしも良く分かんないなあ」　森部長がほおづえをして言う。

「おれも」

「実は、わたしも。茉里は？」

「んー？」　皐月先輩は、文庫本を開いている。本が好きなんだろうな。「さあ、小説とか詩とか書く部でしょ」

「小説？　詩？」　おれは首をかしげる。

「そうね、そうかも。あんまり書いていないけど」　森部長が笑いながら言う。

「へえ……。みなさん、何か書かれるんですか？」

「ええ、年に一作ぐらいだけど。小説を一番書くのは姫じゃないかな」

「まあ、好きですからね」　森部長に言われて、恥ずかしそうに竹内先輩が言う。

「姫？」

「春休みに、公園であった子から名前を聞かれて、言ったらかぐ

や姫みたいだねって言われたんだって」

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　06

「え？　どうしてかぐや姫なんですか？」
「ほら、かぐや姫の話って竹の内側が光ってて、その中にかぐや姫が入っているだろ」　杉先輩が教えてくれる。
ああ、なるほど。竹内光だから……。

おれは、帰りに文芸部の顧問の南条美和先生に、入部届けを提出したあと、東門に向かった。この門が一番家に近い。
文芸部に入ることになってしまった。
べつに興味ないのに。
でも、おれが興味あることなんて、ないのだから、べつにいいかな。
楽しそうだし。
皐月先輩の顔を思い浮かべる。
似てるなあ。
そっくりだ。
もしかして、双子？　でも、名字ちがうし。学年もちがう。
「あ、田中！」　うしろから、関原が来る。やさしいおれは、待ってやることにする。
「どうした？　部活は」
「ああ、今日は自己紹介だけで終わった。本格始動は明日からなんだってさ。田中のほうは？」
「おれも。自己紹介だけだった」
「そうじゃなくて、何部に入ったのさ？」
「文芸部」
「え……？　文芸部？　そんなのあったの？」
「ああ、おれも良く知らなかったけど」
「へええ。……へええ」

「何？」
「べつに。いいんじゃないの。田中らしいじゃん」
「おれらしい？」
「うん、何ていうかな……。やっているかやってないか、良く分かんない部っていうの？　サボりやすそうでいいじゃん。面倒くさがりの田中にはちょうどいいって言うか」
おれは、関原をまってやったことに後悔した。
おれもなんとなくではあるけど、関原と同じ考えだ。
でも、他人に言われるとムッとする。
知らないくせに。
おまえは、何も知らないくせに。
森部長が優しいことや、杉先輩の背が高いこと、竹内先輩の小説が好きなところ、そして皐月先輩があいつに似ているところ。
何も知らないくせに。
知ったかぶりするなよな。
「まあね。部活に入るのは強制だから。しょうがないよな」　おれは、大人気ないことはしない。怒ったりしない。もう、中学生だし。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　07

それにしても、たった一時間ぐらい、あって話しただけなのに、ちょっと悪口を言われたぐらいで、どうして自分の中で、かばってしまうんだろう。

まあ、それくらい。

気に入ったってことか。

ワクワクしているのを感じる。

明日の放課後が楽しみでしかたない。

あんな人たちにあったのはじめてだし、はじめての部活だってこのとある。

「なあ」

「へ？」　いきなり声をかけられて、おれはびっくりする。

「高梨は、美術部に入ったんだってな。絵とか描くのきらいだったのになんでだろうな」

「ええー！」　おれと関原、高梨は幼稚園からの幼なじみだから、良く知っている。高梨が？　何で？　何で美術部に？

「田中。おまえ、高梨のこと好きなんだろ」　ニヤッと関原が聞いてくる。

「何でだよ。そんなわけないだろう。あ、もしかして、関原が好きなんじゃないか」　おれもニヤッと笑う。

「はっ。まさか」

おれが、高梨のこと好きだなんて、そんなことあるわけないだろ。天と地が逆さになっても、それはありえないね。

次の日の放課後。

おれは、スキップしそうないきおいで、図書室に向かった。

「あ、田中くーん。こっちだよ」　森部長が、本棚の間から手招きをしてくる。

「あれ、杉先輩は？」　パイプ椅子に座りながら聞く。竹内先輩は、原稿用紙を出していて、皐月先輩は昨日と同じ文庫本を開いている。

「委員会で遅くなるって」　そういうと、森部長は席を立って、本棚へと向かった。

「……」　さて、おれは何をすればいいんだろう。

椅子に座っている二人の先輩は、真剣にそれぞれにやっているから、話しかけることはできないし、森部長は、本棚の迷路で見えなくなってしまった。

おれも、何か本を読もうかな。

おれは、パイプ椅子を倒さないようにゆっくりと立ちあがると、本棚へと向かった。

さて、何を読むか……。

小説って、あんまり読んだことがない。読んだとしたら、国語の教科書にのっている話しか読んだことがない。

とりあえず、本を一冊、手にとってみる。

うむ。

むずかしそう。あれ、むずかしいって漢字でどう書くんだっけ？

まあ、とりあえず読んでみよう。

――きょうは。いいおてんきですね……。

『きょうは』　のあとに　『。』　をつけるのって、おかしいんじゃないか？

まちがっているじゃないか。この本。

おれは、本でもまちがえるんだなあ。と思って本を本棚に戻した。

なんか、もっと読みやすいのないかな……。漢字が少なくて……。

おれは、本棚をうろうろする。

はあ。ないなあ。

おれは、がっくりと肩を落とした。

昨日のワクワクはどこに行ったんだ……。

つまんない。

部活ってもうちょっと、楽しいもんだと思っていたのになあ。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　08

部員はいい人ばかりだけど、やっていることが良く分からない。
文芸部って、おれには合わないかもしれないな……。
本の題名をボゥとみていると、本棚のうしろのほうから話し声が聞こえてきた。
「ねえ、知ってた？　美術室って美術部のものになるらしいよ」
「へえ。　じゃあ美術室はどうなるの？」
「新しいのができるんだって」
「いいなあ。あんなに広いところを部室にできるなんて……」
「でも、美術部って人数かなり多いらしいから、あの広さでも足りないらしいよ」
「ふーん。じゃあ、どうすんだろ」
「さあ？　新しい美術室を使うんじゃない？」
「あ、そうかもね。あ、ちょっとこれ見て！」
「何？」
「ほら、卯月拓海の新作画集！」
「うわっ。本当だ！　感激！」
「ねえ、卯月拓海って今度、サイン会のためにイギリスから日本に戻ってくるらしいよ」
「本当！　絶対行かなきゃ」
ひそひそ声が、きゃあきゃあとさわぎだす声に変わる。
「静かにっ」　司書の先生に怒られる声も。
美術室が美術部のものに？
そこは関心ないけど、高梨の顔がうかぶ。
美術部かあ。楽しいのかな、高梨は……。
はっ。何を考えているんだ。高梨なんかどうだっていいだろ。
おれは、さっき座った椅子に戻る。
もう、森部長が椅子に座っていた。でも、本を読んではいない。

委員会が終わったのだろう。杉先輩もいる。
「あ、田中くん。座って」　森部長に言われて、おれが座ると、森部長はこう言った。
「ねえ、みんな聞いて。美術部の部室をのっとるわよ」
最初は、何を言っているのか、良く分からなかった。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　09

「いいね。それ」　話に乗ってきたのは、皐月先輩だ。文庫本を閉じて身を乗り出している。
「え？　どういうことですか？」　竹内先輩が聞く。
「のっとるのよ。美術部部室を」　同じことを言う森部長。
杉先輩は、ニコニコと笑っている。
「どうやってですか？」　おれは、一応聞いてみる。まさかとは思うけど、おどしたりとかじゃないだろうね。
「もちろん。おどしたりとかはしないわ」　おれを見すかしたように言う森部長。　「説得するのよ。先生を」
「先生？」
「部員に言ったって、反対されるだけ。どっちにしても、結局最後に動くのは、先生だからね」　丸いメガネを指でおしあげる森部長。
「なるほど。で、誰に言う？」　皐月先輩が聞く。
「まずは、顧問に相談。許可を得たら美術部の顧問に行く。それでもダメなら……」
「ダメなら？」
「校長先生ね。直談判よお」　こぶしを突き上げる森部長。
「おおー」　おれたち四人は拍手をする。
「静かにいいいいー！」　司書の先生に怒られる。
「ね、だから、部室が必要なのよ。おちおち拍手もできやしない」
森部長は首をすくめた。
なんだか、楽しくなってきた。
ただ本を読んでいるよりは、こうして動こうとしているほうがいい。
おれたち文芸部員は、さっそく職員室へ行く。図書室から昇降口に向かって歩くとすぐに職員室がある。

「失礼します。南条先生はいらっしゃいますか？」　森部長が戸をノックして、一人で入っていく。
廊下に残されるおれたち。
おれは、職員室の壁にはってある掲示物を見ることにした。
『英語検定を受けてみませんか？』
『夏休みの部活動について……』
『マッチ一本火事のもと』
『あの卯月拓海がやってくる！　講演会を湖宮中体育館で！』
卯月拓海？　どこかで聞いたことあるような……。何でわざわざ湖宮中に来るんだ？
その掲示物をよく見ると、母校である湖宮中に帰ってくるとある。日付は明後日。
ふーん。おれもいつか有名人になって、こういう風になったりして。
「何、見てるの？　あ、卯月拓海が来るんだー。へー」　竹内先輩と皐月先輩が来る。
「卯月拓海かあ。わたし、あの人きらい」　首をふる皐月先輩。
「何で？　すてきなイラストをたくさん書くじゃない」
「きらいと言ったらきらい。大きらい」
「へえ。茉里がきらいなんて、よほどのことなのねえ」
竹内先輩が意外そうにうなずいていると、森部長が職員室から出てきた。南条先生もいる。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　１０

「話は聞いたわ。わたしも前から、文芸部に部室がないのはおかしいと思っていたのよ。全部は無理としても、半分、四分の一ぐらいはもらえるんじゃないかしら」　真剣な顔で話す南条先生。頼もしい先生だ。

「それじゃあ、さっそく佐沼先生に……」　杉先輩があいている職員室をのぞく。佐沼先生とは美術部の顧問の先生のことだ。おれのクラスの担任でもある。

「それが今日は、出張でいないんですって」　森部長が肩をすくめた。

「帰ってくるのは明後日になるのよ」

「明後日じゃあダメ」　突然、皐月先輩が声を出した。

「何で？」　森部長が首をすくめる。

「今日か、明日じゃなきゃ……」　うつむく皐月先輩。

「どうしたの？　茉里……」　竹内先輩が皐月先輩の顔をのぞきこむ。

「ううん。なんでもない」　皐月先輩は顔をあげると、ほほえんだ。

「それじゃあ、明後日にでも佐沼先生のところに行きましょう」

森部長がそう言って、今日はお開きになった。

学校から家に帰って黒飴をなめていたら、三十分後くらいに家の電話が鳴った。

「はい、もしもし」

「あ、田中さんのお宅ですか？　太一くんをお願いします」　なんとびっくり、森部長だ。

「太一です。どうしたんですか？」

「あのね、佐沼先生の電話番号を知ってる？　たしか田中くんの

クラスの先生って佐沼先生だったよね」
「知ってますけど……」
「じゃあ、教えてくれる？」
「はい。えっと……、ちょっと待ってくださいね」　おれは受話器を持っていないほうの手で電話機の横にあるアドレス帳を引っ張り出す。
さ……さ、さぬま……。っと、……あった。
「言いますよ。いいですか。――――です」　受話器の向こうでえんぴつを走らせる音がする。
「うん。ありがとう」
「聞いてどうするんですか？　佐沼先生に電話を？」
「……」
「森部長？」
「あのね、姫には内緒にしてくれる？」
「……はい」　竹内先輩に内緒？　どういうことだろう。
「茉里ちゃんがね……、転校することになったの」
「え……」
「しかも、明後日」　それで皐月先輩が今日か明日じゃないと……って言ってたんだ。
「でも、どうして竹内先輩には内緒なんです？」
「わたしも帰りに茉里ちゃんから聞いたんだけど、そうしてくれって言われて……」
「杉先輩には、話したんですか？」
「ううん、明日話すつもり。内緒にして欲しいのは姫だけにってことだから……」
「そうなんですか……」　なんだか、悲しくなってきた。せっかく文芸部に入ったのに、もう、お別れなんて。
「どこに、転校するんですか？」
「それが、教えてくれないのよ、茉里ちゃん。感じからすると、とっても遠いところみたいだけど」

「……」

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　１１

「だからね、今から佐沼先生に電話して、部室のこと話そうと思うの。なんか、じっとしていられなくて」
「でも、出張なんですよね？　家に電話しても……」
「ええ。家にもし誰かいたら、携帯電話の番号を教えてもらうつもり」
「あ、そうか」
「それじゃあ。今から電話するから」
「はい。また明日」
受話器を置く。
皐月先輩、行っちゃうんだ……。
どうして、竹内先輩には内緒なんだろう。
仲が悪いのかな。
でも、そんな風には見えない。
逆に、生まれながらにしての親友という印象を受けたのに。
本当は、ちがうのかなあ。
二十分後、また森部長から電話があった。
「いたわ。佐沼先生のところで小学生の男の子に教えてもらったの。なんかね、湖宮中のこと話したら、竹内さんがいる部に入るんです。って言ってたわ」
「へえ。竹内先輩の知りなんですかね」
「さあ。そこらへんは良く分からないけど。今、六年生だって。来年になったら入ってくるわよ」
「楽しみだなあ。で、先生に電話をしたんですか」
「まだよ。今から。なんだかうれしくって電話しちゃった」
「あ、そうなんですか」
受話器を置く。母が夕食の準備ができたと言って来た。
今日はカレーか。きっと、明日もカレーだろう。

食後の黒飴をなめおわった後も、森部長からの電話は来ない。
まだ話をしているのだろうか。もう、終わったのだろうか。
とっても気になるところだ。
電話してみようかな。
受話器を持って、部長の電話番号をおす。入部届けを出した日に、部員全員の電話番号を教えられた。緊急連絡のためだそうだ。
通話中だった。
まだ話しているのだろうか。もう、さっき電話を切ってから三時間にもなるというのに。

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　１２

次の日の放課後。皐月先輩が転校するのは、明日になった。
「ねえ、茉里。新作書いてみたんだけど。読んでくれる？」　竹内先輩が、原稿用紙の束をもってニコニコしている。
皐月先輩は、文庫本に目を落として顔をあげない。
「茉里……？」
「え、ああ、ごめん」　皐月先輩は文庫本を閉じる。
杉先輩を見ると、本を読むふりをして皐月先輩と竹内先輩のことを見ている。きっと、森部長と同じクラスだから、聞いたんだろう。皐月先輩のことを。
おれはというと、原稿用紙を買ってきた。
本を読むのはつまらないし、せっかく文芸部に入ったのだから、何かしら書いてみようと思ったからだ。
そのとき、図書室に森部長と南条先生が来た。
「聞いて、みんな。ビックニュースよ！」　森部長が腕を広げながら言う。　「美術部部室の四分の一が文芸部の部室になるの！」
「え、もう？　だって、佐沼先生は明日帰ってくるんじゃ……」
竹内先輩が目を見開いて言う。皐月先輩もおどろいている。
「昨日、夜遅くに佐沼先生から電話がかかってきてね、そういう話になったの。文芸部にあげますよって」　南条先生が説明する。
「へえ。何で知ってたんだろ。わたしたちが部室を欲しがっていたこと」　皐月先輩が首をひねる。
森部長が昨日頑張っていたことは、おれと杉先輩しか知らない。
「いつですか？　いつから部室が使えるようになるんですか？」
おれは聞く。
「今からでも、使えるそうよ。旧美術室のはしっこのテーブルだけどね。来月から、旧美術室を二つに分ける工事を行うことも決まっているわ」　南条先生はほほえみながら言う。　「でも、残念ね。

皐月さんは転校するから」
「えっ」　急に、図書室中が静かになった。竹内先輩の声がひびく。　「茉里……。本当？」
「うん。明日」　皐月先輩が竹内先輩と目を合わせないようにして、言う。
「どこへ？」
「イギリス。お父さんが、日本に戻って来るから……。そのときに一緒に行く。実際に行くのは来週になるけど。いろいろ準備があるから、学校は明日までなんだ」
イギリス？
明日？
日本に戻って来る？
まさか、皐月先輩のお父さんって……。
「卯月拓海？」
皐月先輩はうなずく。
「そう。卯月拓海はペンネーム。本名は皐月匠。イラストレータを仕事にしている」
「……どうして？　今まで日本にお母さんと暮らしてきたじゃない」　竹内先輩が聞く。声が涙声だ。
「お母さんも行くの。妹も一緒。家族みんなで行くことになったんだ。前から決まっていたことなんだよ、光」　皐月先輩が、やっと竹内先輩のほうを見る。
「どうして……。今まで教えてくれなかったの？」
「……」　皐月先輩はだまって図書室を出て行った。
「茉里！」　竹内先輩がさけんだ。その場に泣きくずれる。
森部長が、竹内先輩に近寄る。
「姫……」

冬は、ココアに涙の雪を溶かして　１３

次の日、竹内先輩は学校を休んだ。
卯月拓海が学校に来るということで、朝からクラスのみんなは興奮ぎみだった。
「卯月拓海が来るんだぜ。すごいよな。うちの学校出身だったなんて」　関原が言ってくる。
「知ってたのか？　卯月拓海のこと」
「ああ、もちろん。え、まさかおまえ、知らなかったのか？」
「まあ、ちょっと前までは知らなかったな」
五、六時間目が卯月拓海の講演会になった。
「こんにちは。みなさん」　卯月拓の声がマイクを通して、体育館にひびき渡る。
講演会がはじまった。
何を言っていたのか、良く覚えていない。
卯月拓海を前から知っていたわけでもないし、イラストのファンでもない。
でも、卯月拓海。
その人をじっと見た。
皐月先輩の父親だけある、きれいで、りっぱだ。
声は低くても心の底にひびくようにすんでいる。
ふーん。
感想といったら、それだけしかないけど、いい二時間だったと言える。
学校が終わった後、皐月先輩と父親の皐月匠は、帰っていった。
見送る文芸部員に、皐月先輩は、いつも読んでいた文庫本を森部長に差し出した。
「これ……、光に渡してください」
「うん。分かった」　森部長はうなずいた。

「手紙書きます……っていっても、住所わかんないから書かないけど、電話番号は分かるから、何かあったら電話していい？」
「もちろん。でも、時差を良く考えてな」　杉先輩がほほえむ。
「はい。……それじゃあ」　皐月先輩はおじぎをすると、ゆっくり回れ右をして歩いていく。
最後まで、悲しそうな顔をしていた。
「森部長……」　おれは、皐月先輩のうしろ姿を見ながら言う。
「何？」
「何で、皐月先輩は竹内先輩に最後まで、引越しのこと言わなかったんでしょうか……。あんなに仲良さそうだったのに……」
「だからだよ」　杉先輩がつぶやく。「姫の悲しそうな顔を見たくなかったんだ」
「わたしも、そう思うよ。でも、姫は裏切られた気分になったんだと思う。だけど、姫がもし、引越しするってなったら、きっと姫もそうしていたと思う。それほど、大切な仲なんだよ。茉里と光は」

あれから、一年ちょっとたった。
森部長と杉先輩は卒業して、竹内先輩が部長になった。
佐沼先生はちがう中学に転任になって、その息子が文芸部に来た。
竹内先輩は、あれから小説を書かなくなった。
皐月先輩の話も、全くしなくなった。
でも、皐月先輩のことを怒ってたり憎んでいたりは、絶対していない。
なぜなら。
毎日、暇さえあれば。暇じゃないときも。
皐月先輩からもらった、文庫版卯月拓海のイラスト集をながめているから。

雪溶ける少し前　０１

ここに、一枚の原稿用紙がある。
作者の名は、竹内光。

『桜はもう散った。
花びらたちは地面に落ち、つもる。
まるで雪のように。
それは、雪のようにつめたく、
ホットココアのように、あたたかい
そのホットココアはきっと、桜の涙を溶かしてくれるだろう』

いつも掃除をしていない窓が、何でこんなにきれいなんだと思ったら、窓が開いていた。
この研究所を建てたときから、鍵をこわし、開かないようにしていたのに……。
……時が来たんだ。
わしは、ゆっくりと席を立った。トムくんを肩に乗せる。
トムくんは、わしのことをちらりと見ると、窓から飛び立っていった。
「さようなら。トムくん」　大空に羽ばたくトムくんを、見えなくなるまでずっとながめていた。
そう。
トムくんはわしが作った鳥型ロボット。
トムくん自身は、自分が人間だと思っていた。
それが、ついさっき。

わしが話したネコの話で気づいたのだろう。
自分も、ロボットなんだと。
そして、わしが、トムくんを恐れていたことも。
トムくんは、大好きだ。でも、恐ろしい。
やっぱり、ロボットだからだろうか。
ケガをしても、すぐ治る。
飛べるのに、言葉がしゃべれる。
わしが、理想としていたことなのに。
現実になると恐ろしい。
こんなはずじゃなかったと、今になって思える。

旅立ちなさい。トム。
どこまでも、果てしない空を。
燃料が尽きる、その時まで。

雪溶ける少し前　０１（後書き）

―あ　と　が　き―

こんにちは。葉崎です。

約一ヶ月に亘って連載した『ぼくたちの四季』ですが、今日で最終話です。

実は、この作品は某新人賞に応募して落ちたものです。投稿時そのまま掲載させていただきました。見難い部分があるかと思います。その場合は、評価感想していただけると、今後の執筆に大いに役立つことと思いますので、よろしくお願いします。

（余談）　作者自身のお気に入りは田中君です。なので、本来は違う人物の予定だった「冬は、ココアに～」の主役に抜擢。本当は、竹内光の予定でした。

それでは、また明日。

『ぼくたちの四季』　登場人物紹介（前書き）

―まえがき―

本編『ぼくたちの四季』の全登場人物の名前と簡単な紹介をしています。

ネタバレの可能性がありますのですべて読み終わってから見ていただきたいです。

総人数…３６人　（同一人物を含む）

『ぼくたちの四季』　登場人物紹介

『ぼくたちの四季』　登場人物

佐沼 結人	湖宮中一年	
佐沼 結衣	湖宮小一年	
竹内 光	湖宮中三年	
竹内 透	湖宮中一年	
竹内 響	湖宮中一年	
田中 太一	湖宮中二年	
高梨 薫子	湖宮中二年	
南条 美和	文芸部顧問	
佐藤 沙貴絵	湖宮中三年	
木野 葉子	湖宮中一年	
宮崎 涼香	湖宮中一年	
野澤 莉子	湖宮中一年	
亀塚 健嗣	湖宮中一年	
遠藤 弘樹	湖宮中二年	
菅野 砂知	湖宮中二年	
佐竹	湖宮中一年	
鈴木	湖宮中一年	
渡辺	湖宮中一年	
高橋	湖宮中一年	
横山 明日香	湖宮中一年	
坂井	湖宮中一年	
千坂	湖宮中一年	
大林	湖宮中三年	

浩太　湖宮中二年
久保　湖宮中三年
山崎　湖宮中二年

森　那津子　元湖宮中三年
杉　雅治　元湖宮中三年
皐月　茉里　元湖宮中二年
関原　元湖宮中一年
佐沼　元美術部顧問
皐月　匠　茉里の父

ツウェンター博士　工学博士
トム　助手
香奈　小学生

卯月　拓海　イラストレータ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9573e/

ぼくたちの四季

2010年10月29日01時11分発行